

孟 郊 詩 論 (上)

——連作詩を中心に——

山之内 正彦

一 詩とへ詩人

孟郊という詩人の志を、すんなり上等なものであるということは、どうみてもむつかしそうだ。私が『孟東野詩集』を開くたびに感じるもどかしさやとまどいは、こんな寒虫の叫びにつきあうのは割に合わないという蘇東坡的な立場から生じるのではなく、これほどの寒苦に己れを追いつめる根柢の深さは疑えないとして、その根柢がどんな形のものであり、従って孟郊の詩人としての志の高さをどの程度に値踏みしたらいいものか、すぐには勘が効かないところから生じるらしい。

同じ韓門の詩人でも、李賀なら暗く輝くパトスとエロスの圧倒的な噴出によって、まずひと思いに撃滅されてしまえばいいのだし、陰々とへ瘦くせ冷えた賈島にしたところで、詩という彼の唯一の牙城を守る姿勢には、ある安定した強靱さがうかがえる。親分の韓愈となれば、時にふんぶんたる俗気を臭わせながらも、沈潜した気迫と、一種透明

な距離を保って言語を操作する臂力を具えたるに、闊達なユーモアと繊細なリリズムにもことかかず、さすがに詩人としても大物だと思わせずにはおかない。ところが孟郊ときたひには、被害コンプレックスの権化といったころではないか。これでもかといわんばかりに自虐的なイメージを繰り出したあげくに、世道人心に呪咀をなげつけて、あまり質の良くない説教を垂れるという仕組みになっている。「秋懷十五首⁽¹⁾」「峽哀十首⁽²⁾」等の連作を読んでいると、とても共感の涙をさせられるなどという気にはなれず、孤独と不幸に睦んでいるかのようなこの詩人の執拗さげんがりして、こんな年のとり方だけはごめんだといったくなるのは、私だけではあるまい。

だが、どうこきおろしてみても、この詩人に、並み居る唐詩人たちのなかで、一流とまではゆかずとも二流の上くらいにはランクさせずにおかない強烈な独自性が存在することを否定するわけにはゆかない。「秋懷」その他の連作から得られた印象だけで孟郊を裁断してしまうのはいささか酷で、『孟東野詩集』の全体はもう少し多彩な展開を見せている、ということもあるだろう。しかし、孟郊の詩のもっとも精彩ある本命がこれらの連作(および同傾向の作品)であることこそが強調されなければならないのであって、執拗な被害コンプレックスが外化されて加害的な自然像に凝り固まり、それが遂には脅迫的な不気味さを帯びるところまで増殖してゆくこの種の作品がなかったとしたら、彼が類い稀な個性によって唐代詩史の欠くべからざる一異才たることを主張しうる根拠は、はるかに稀薄なものとなっていたに相違ない。個的な悲慘の底をぐりぬけて普遍に到達するのが抒情詩人というものだといってしまえばそれまでだが、孟郊においては、不幸の意識の詩的な処理の仕方の抜け路を塞いだ直接性が、他の詩人には見出し難いほど徹底しているのであり、この点を無視して彼を評価することは、ほとんど意味をなさないといってよい。つまり、いちばん独創的な(いい)作品が、同時にいちばん(やりきれない)というアンビヴァレントな感覚を伴うことなし

に読むことができないのであって、このような経験を読者に強いる詩人というのは、少くとも唐代においては、きわめて稀だと思ふ。

孟郊に対する古来の評価が、はなはだしく褒貶の分れるものとなっているのも、右のようなこの詩人の特質に由来するであろう。極端な悲愁には我慢がならない、という人間にとつて、孟郊の詩は否定の対象にかなりえないが、悲愁の言もまた良しとする以上、この詩人が老いと疎外の意識を詩のことばに凝集する鋭さや迫力を、誰しも評価しないわけにはゆかなくなるはずである。大勢として、唐人の彼に対する評価が高く、宋以後に毀貶の評が多くなるのは、士人の氣風の時代的变化からして、まことに自然であつた。

孟郊を持ち上げる人びとの劈頭は、いうまでもなく、十七才年長の友であつたこの詩人の人柄に惚れ込んで、「頭を低れて東野を拝し」、自分は雲に、東野は竜に身を変え、四方上下に東野を逐つてゆきたい⁽³⁾（「醉留東野」）、とまでいつた韓愈である。韓愈によれば、孟郊のポエジーは、冥観洞古今、象外逐幽好——想像的な眼によつて歴史を貫き、現象の彼方に隠れ潜む美を追求する、のであり、その表現は、横空盤硬語、妥帖力排鼻——空いっばいに硬質の言語をわだかまらせ、びたりときまつた力のこもり方は、古代の力持ち鼻をも押しのける（薦士⁽⁴⁾）、ということになる。韓愈のオーヴァーナ称讚には、たぶん、「韓子は稍や姦黠⁽⁵⁾」だという俗物性の自覚に発する孟郊へのコンプレックスが大いに作用しているし、まして推薦の詩となれば額面通りには受け取れないとしても、彼の表現の特質を「硬語」に見た韓愈の批評は的確だつた。感覚的な悦びを意識的に殺し、短小な五言の粹と、対偶を排した古詩の進行のなかで、詰曲渋滞しながらせりあつてゐる抵抗感の強い孟郊の詩のことばは、まことに「硬語」と呼ばれるにふさわしい。

また、孟郊の作詩について、韓愈は、「己れの目を切り裂き、心臓を突き刺して生み出された表現の刃に、対象は糸すじのように分解し、鉤のような詞章、刺を持つ詩句が読者の臍腑を引っぱり出す。鬼神の手が働いているかと思わせることが続々と創造されるのだ。こうして文学に専念して名利を切り捨て、あくせく努める世人を尻目に、われ一人悠然と構えていた。時流に後れるぞという忠告に対して、そんなものはとくに人に呉れてやったよ、後生大事に取っておく必要があるか、と答えた。」(貞曜先生墓誌銘⁽⁶⁾)と語る。「劇目鈍心、刃迎縷解、鉤章棘句、搯擢胃腎」という、イメージも用語もまったく孟郊好みの表現によるこの死せる詩人へのオマージュは、その文学に対する韓愈の親炙の深さを物語って余りある。韓愈の語る孟郊の詩作は、対象と同時に自己をも切りきざまずにはおかぬ鋭い痛苦に満ちた表現行為にほかならなかつた。そして、孟郊の心事が、ここに伝えられたことはほどに颯爽としていたとは到底考えられないが、彼の文学が世渡りの拙さを代償とするものであったことは、官界に生きうる韓愈にとって、痛切な事実だったにちがいない。韓愈は銘して曰う、「維れ執りて豈^よらず、維れ出して警^{はか}られず、維れ卒ひに施さず、以ってその詩を昌んにす。」⁽⁷⁾

他の文学仲間たちも、贈答・哀悼・推薦の詩文に口をきわめて孟郊を称讃するのは、文章の性質から当然かもしれないが、しばしば貧窮がその人格の高潔さと表裏して語られているのは、単なる事実という以上に、彼の詩と〈窮〉とのぬきさしならぬ関係が周囲の誰にも感じられていたからだろう。そして、韓愈とともに、孟郊の表現力の格別な鋭さをいう王建の詩が目止まる。

吟損秋月不明 秋天を吟損して月明かならず

蘭無香氣鶴無聲 蘭は香氣無く鶴は声無し

自從東野先生死 東野先生死して自從り

側近雲天得散行 雲天に側近して散行するを得たり 「哭孟東野二首」其一⁽⁹⁾

晩唐の陸龜蒙が、天物を抉摘り刻削んでその情状を暴露したため天罰を受け、生涯を不幸に終った詩人の代表者として、李賀・李商隱とともに「東野は窮せり」と彼の名を挙げるのも、王建のこの詩の考え方を一歩推し進めたものといえる。詩人が「万類を陵暴に困しめる」ものだとこの詩の系譜について考察する余裕はないが、漂陽 巢尉となった孟郊が、勤めをさぼっては佳景のなかで苦吟にばかり耽つて巢令に嫌われ、代役を雇うために半俸を減じられたあげくに辞職してしまった、という話の後に書かれた陸龜蒙のこのことは、実生活の失敗と詩表現の深刻さが、不可分に結びついて深みを加えていった詩人の宿命的な不幸に対する、批判とも感慨ともつかぬ強い関心を示すものといえるだろう。ともあれ、唐人が孟郊につけた点は概して高かった。その五言古詩は韓愈の古文とともに「孟詩韓筆」と並称されたといわれ、また、「杏塲九首」の詩は、洛陽城中の各家に一本が伝えられていた——王建「哭孟東野」其二「但是洛陽城裏客、家傳一本杏塲詩」——という。「杏塲」が孟郊の詩としては、もっとも万人向きの感傷性をもったものであるとはいえず、「天もわが誠を知らず、子孫を剪棄した」と、天に対する不信をぶちまけている。この詩が広く受け入れられたことは、哀しんで傷めることを拒否しなかった時代の好尚をうかがわせる。

ところが宋代になると様子が変わってくる。孟郊を貶し始めたのは、「下視區區郊與島、螢飛露濕吟秋草 下に區區たる郊と島を視るに、螢飛び露濕り秋草に吟ず」(「太白戲聖俞」)とうたった歐陽脩あたりらしいが、大っぴらに攻撃を開始したのは蘇軾で、「寒燈に照らされた暗がりの花、佳処はたまにしか出くわさない。小魚や肉のない川蟹のはさみを食うと同じで、手間のわりに引き合わぬ。短い人生、何を苦しんでこんな寒虫の叫びに耳を傾ける必要があらう、

一坏やる方がましだ」とうたうその「讀孟郊詩」其^(七)一と、賈島と組にして孟郊に奉った、当っていいないこともない「郊寒島瘦」⁽¹⁸⁾というキャッチ・フレーズは、あまりにも有名である。闊達な楽天性を志向して宋代士大夫の氣風を代表する東坡のような精神にとつて、悲愁に徹した孟郊の詩境が我慢のならないものに映ったのは無理もないが、その東坡にしても、決して孟郊をすげなく切り棄てることができたわけではなかった。「讀孟郊詩」其^(七)二はうたう、

我憎孟郊詩 我れ孟郊の詩を憎むも

復作孟郊語 復た孟郊の語を作す

飢腸自鳴喚 飢腸 自ら鳴喚し

空壁轉饑鼠 空壁 饑鼠轉ず

詩從肺腑出 詩は肺腑從り出で

出輒愁肺腑 出づれば輒ち肺腑を愁はしむ

有如黃河魚 黃河の魚の

出膏以自煮 膏を出だして以つて自ら煮るが如くなる有り

嫌いなはずの孟郊に似た不景気なことをばを無意識のうちに語っている、という述懐は、不遇文人の悲哀を極限までつきつめ、そこに居直つて書かれた孟郊の詩が、いくらかでも相似た境遇に置かれた者に無視しえない感染力を持つことを自ずと告白している。「詩從肺腑出」以下の四行は、東坡の自己批判にはちがいないが、同時に、不幸と詩が直結し呪縛しあったものとして孟郊の生を眺めているととれなくもない。

以後の孟郊に対する評価史は、韓愈派と蘇軾派が入り乱れてなかなか賑やかであり、けつきよく、張籍と並べて、

「要するに一等の（無視しえざる一種独特の）詩」とした曾季狸『艇齋詩話』の評あたりが中庸を得た篤論ということになるのだろう。孟郊のように詩境が狭くてあくの強い詩人の場合、好みが極端に分裂するのは自然であるが、攻撃者の側から多く放たれる、寒渋・蹇澁窮僻・寒苦・刻苦・琢削不假・寒削(20)というたぐいの印象批評は、〈硬語〉を彫琢することに よってしか、不幸の意識に占領されたわが心に片の付けようがなかったこの詩人のあり方を、毀貶の語なるが故にむしろ鋭く感じ取っており、孟郊にしてみれば、これらの評語は、まさに我が意を得たりというところだたろう。これが、擁護者あるいは中を取った部分的弁護者になると、彼の困窮に同情するか、詩風と人格をひっくり返して高古と称讃するか、詩句の鍛錬を清深高妙・詞意精確などと評価するかにとまり、批評としての質はあまり良くない。そのなかでは、清末の人施補華の『峴傭說詩』が、彼のスタイルを「極度に堅く瘦せており、小なるが故にいよいよ守りの固い偃陽の城のようなもので、容易に攻破できない」と評する(21)のが、いちばんいいところを突いているようだ。しかし、私は古来の数多い孟郊評のなかでは、毀貶の語ながら、彼の「出門即有礙、誰謂天地寬 門を出づれば即ち礙げ有り、誰か謂ふ天地寛しと」(22)（贈崔純亮）を踏まえて、韓愈のスケールと比較しつつ、

東野窮愁死不休 東野の窮愁 死すとも休まず

高天厚地一詩囚 高天厚地の一詩囚

江山萬古潮陽筆 江山 萬古 潮陽の筆

合在元龍百尺樓 合に元龍百尺の樓に在るべし

とうたった元好問の「論詩絶句」が、「詩囚」の一語で見事にこの詩人の本質を射抜いた鋭さによって、まず第一等のものであると思う。まったく「高天厚地の一詩囚」とはうまいことをいったもので、詩と実人生との価値を転倒し

た感のある中・晩唐の苦吟派あるいは〈芸術派〉の詩人達にもまして、死すとも休まぬ窮愁そのものによって己れを詩に監禁してしまった点で、もっとも直接的だったのが、この孟郊という狷介な詩人にはかならなかったのである。

「詩囚」だけあって孟郊は詩中に詩あるいは詩人をうたうことが多い。彼にとって、詩・詩人とはいかなるものだったのか。

寒澁刻苦の詩囚にも、詩は万物を鏗裁するものでなければならぬという壮大な抱負がなかったわけではない。製作年代は不明であるが、若き後輩に贈ったと思われる「贈鄭夫子魴」は、

天地入胸臆 天地胸臆に入り

吁嗟生風雷 吁嗟して風雷を生ず

文章得其微 文章 其の微を得

物象由我裁 物象 我に由りて裁たる

宋玉逞大句 宋玉 大句を逞にし

李白飛狂才 李白 狂才を飛ばす

苟非聖賢心 苟しくも聖賢の心に非ざれば

孰與造化該 孰か造化を該はんや

勉矣鄭夫子 勉めよや 鄭夫子

驪珠今始胎 驪珠 今始めて胎す

とうたう。天地が胸臆に入りこんで——恐らく気が媒介となって——感情を激発し、その精微なるところを捉える文章——主として詩が念頭に置かれていよう——を創造する我が手の動くままに、万物の姿が裁断形象される、という考え方自体は別に珍らしいものではなく、遡れば、『文心雕龍』神思篇・『詩品』序・陸機「文賦」等の文学論の古典に源流が求められるだろう。ただ、ここで孟郊の考える詩のあり方が、諷諫興寄といった詩の社会・政治的効用面よりは、想像力（あるいはより漠然と詩精神の如きもの）が万物を把握し、形象するという文学表現の原理面に傾いていることに留意しておけばよい。むしろ、「聖賢の心」をいう以上、社会・政治的なものは前提とされているだろうが、「造化を諷う」とは、少くとも効用を限定・強調するいい方ではない。詩の働きは宇宙を包括するほどの大きさをもち、聖賢の心を心としなければそのような境地には達しえない、という、表現の原理を述べたものと受取れる。賈島の詩について、「燕僧擺造化 萬有隨手奔 燕僧造化を擺き、万有手に随つて奔る」〔戲贈无本二首〕其二⁽²⁵⁾というのと同類のことばである。じつさい、孟郊は詩の社会的効用について述べることが少ない。むしろ、リゴリスティックに古代志向を標榜する孟郊に、「何當補風教、爲薦三百篇 何れか當に風教を補ひ、為に三百篇を薦めん」〔送魏端公入朝〕⁽²⁶⁾「能詩不如歌、悵望三百篇 詩を能くするは歌に如かず、悵望す三百篇」〔教坊小兒〕⁽²⁷⁾といったたぐいの、詩の正統を詩経につなげることは散見することは異とするに足りない。なかでも、

天寶太白歿 天寶に太白歿し

六義已消歇 六義已に消歇す

大哉國風本 大なる哉 国風の本

喪而王澤竭 喪はれて王沢竭く

先生今復生 先生今復た生まる

斯文信難缺 斯文信に缺け難し

下筆證興亡 筆を下して興亡を証し

陳詞備風骨 詞を陳ねて風骨を備ふ

高秋數奏琴 高秋 數奏の琴

澄潭一輪月 澄潭 一輪の月

誰作採詩官 誰か採詩の官と作らん

忍之不揮發 之に忍びて揮發せざるや

とうたう「讀張碧集」⁽²⁸⁾は、この種の発言のうちでも代表的なものといえる。しかし、ほとんど絶望的な姿勢で三百篇への憧憬を述べるにすぎない前二首の場合はもちろん、李白の死とともに滅んだ斯文の再生を喜ぶこの一首にしても、そこに抽象的な精神主義以上のものを発見することは困難であろう。詩の根本精神はあくまで六義でなければならぬいかもしれないが、同時代の社会的広がりゆえにこれを展開してゆく契機を、孟郊はほとんど見出ししていない。「誰作採詩官、忍之不揮發」という結びの二句も、「採詩の官になる奴なんかいやしない、むざむざ闇に埋もれてしまふのか」という絶望への傾斜が感じられるし、「局促塵末吏、幽老病中弦、徒懷青雲價、忽至白髮年」からつづく「何當補風教」の「何當」にも、とてもまともな期待がこめられているとは思えない。自己の詩の社会的効用についての断念が、むしろこの種の正統意識を強く呼び出していると見られるのである。実作について見ても、彼には、民衆の代弁者として時代の社会的矛盾を告発する、といった姿勢は乏しく、比較的少数の〈社会詩〉も、代表作とするに足

るほどの質を持つものではない。(深刻な社会批判を孟郊のメリットとして評価しようとする見解をしばしば目にするが、私はあまり納得がゆかない。この点については統稿で触れる予定) 詩についての認識もこれに見合っており、陳子昂から李・杜・元結らを経て、元稹・白居易に至って強烈に意識化され、高揚する詩の社会的効用に対する志向の流れとは、明らかに立場を異にしていた。

では、先に挙げた「贈鄭夫子魴」や「戲贈无本二首」其二の詩句から、〈芸術派〉的立場を予想してよいのかといえ、そうではない。この種のことばは詩経への嚮往をうたう詩句とともに、詩と詩人についての認識を語って、もっとも孟郊の本色を示したものとはいえないのである。「戲贈无本二首」でも、より秀れているものは其一であって、そこでは、詩人无本(賈島)の姿が

長安秋聲乾 長安 秋声乾き

木葉相號悲 木葉 相ひ号んで悲し

瘦僧臥冰凌 瘦僧 冰凌に臥し

嘲詠含金瘕 嘲詠 金瘕を含む

金瘕非戰痕 金瘕 戦痕に非ず

峭病方在茲 峭病 方に茲に在り

とうたわれる。ここに並んだ、乾燥・冷たさ・鋭さ・険しさ、特に刃物ときずが、孟郊の詩のもっとも特徴的な感覚とイメージであることは次節以下に詳述するが、彼によれば、詩そのものもまた、このように苛酷な肉体的被害・損傷から生まれ、それ故鋭く尖らざるをえないものである。詩を生む精神の痛みは、肉体的な痛み[、]に転化されて感受さ

れる。むろん、単なる外傷ではなく、乾いた長安の秋風と氷の寢床によって外から与えられたものであると同時に、内なる峭^{せう}しい病癖によるものでもある。たまたま季節が秋であり、うたわれたのが賈島であったから、という偶然は、孟郊ならではの表現によって、彼にとつての詩発生の機制を語る必然に転じているといえよう。ここにあるのは、一種の自虐の詩学乃至は美学ともいうべきものである。戯れに贈ったこの詩ではある程度の余裕が感じられるとすれば、次節に述べるように、「秋懷十五首」其五の「病骨可軋物、酸吟亦成文 病骨物を軋^ある可く、酸吟も亦た文を成す」になると、己れの老残をうたうだけに被害感はより切迫し、逆に追いつめられた地点での自負が生じてくるのであるが、基本的には同じ考え方が示されている。

追いつめられた、あるいは追いつめた、といっても同じことだが、このような地点に立って己れの詩の先行きを眺める詩人は、はなはだ暗い展望しか語ることができない。

老恨⁽²⁹⁾

- 1 無子抄文字 子の文字を抄すなく
- 2 老吟多飄零 老吟 多く飄零す
- 3 有時吐向床 時有りて床に向ひて吐くも
- 4 枕席不解聽 枕席は聴^あく解はず
- 5 鬪蟻甚微細 鬪蟻 甚だ微細なるも
- 6 病聞亦清冷 病聞 亦た清冷なり
- 7 小大不自識 小大 自ら識らざるも

8 自然天性靈 自然なり 天の性靈

〔大意〕 文字を書き写してくれる子供もいないので、わが老年の詩は風のまにまに散佚する。時に寢床にむかって吐き出すが、枕やござが聞いてくれるはずもない。蟻の喧嘩はごくかすかな音しかたてないが、病気で鋭敏になった耳には、はつきり澄んで聞こえる。どれほどの音量なのか私には分らぬが、天が与えた人為を加えぬ魂の響きであることはたしかだ。

〔注〕 (5)(6)は、『晋書』殷仲堪伝の「仲堪父嘗患耳聾、閉牀下蟻動、謂之年聞」に拠る。

晩年、立てつづけに子供を失った老詩人の詩は、孤立のなかで消滅の運命にさらされている(1)~(4)。つづく後半の解釈は自信を欠くが、私には、病人の異常に鋭くなった聴覚のことをいいつつ、鬨蟻の微かな音に己れの老吟の声を聞きとっているように思える。とするなら、病んだ耳だからこそ蟻の音も大きく明晰に聞きとれる、というのは、老残と詩の孤立に対する相当なコンプレックに裏打ちされながら、居直るようにして孤高に縋りついていることばということになるだろう。(8)を、詩人自身のことをいうととつても、「自然」なる「性靈」に、詩人としての感覚の鋭さに対する自負を読みとることは充分に可能である。

だが、歌の手柄で朝廷に召し抱えられ、寺院の供養に竹枝詞をうたう十才の教坊の小兒と、逝川のほとりにひとり詩を吟ずる六十翁を引き比べて、さきほど引いた「能詩不如歌、悵望三百篇」一聯を結論とする「教坊小兒」や、

自慚⁽³⁰⁾

1 傾盡眼中力 眼中の力を傾け尽し

2 抄詩過與人 詩を抄して過ぎて人に与ふ

- 3 自悲風雅老 自ら風雅の老いたるを悲しむ
- 4 恐被巴竹嘖 恐らくは巴竹の嘖りを被らん
- 5 零落雪文字 零落たり 雪の文字
- 6 分明鏡精神 分明なり 鏡の精神
- 7 坐甘冰抱晚 坐して冰の晩を抱くに甘んじ
- 8 永謝酒懷春 永く酒の春を懐くを謝す
- 9 徒有言言舊 徒らに言言の旧き有り
- 10 慙無默默新 默默の新しき無きに慙づ
- 11 始驚儒教誤 始めて儒教の誤れるに驚き
- 12 漸與佛乘親 漸く仏乘に親しむ

〈大意〉 観察力を傾け尽して作った詩を書き写しては、相手も見ずに人にくれてやりすぎたようだ(?)。悲しいことに私の正しきポエジーは老いはて、下里巴人や竹枝をもてはやしている連中に怒られるだけではないか(?)。はらはらとこぼれ散る雪のように潔白な文字、鏡のように明らかに物を映す精神、それが私の詩だったのだが。なすところもなく水にわが晩年を抱かせ、酒にかもされる春ののどかさとは永遠におさらばだ。あいも変らぬことは、ことば。沈黙を守る明日へと転進できぬことが恥かしい。かくて、私は始めて儒の教えが誤りであったことに驚き、しだいに大乘の教えに親しみだしている。

〈注〉 (4)の解はまったく自信を欠く。他に典故を思いつかないので、仮に宋玉「對楚王問」と、「教坊小兒」に「去年西京寺、衆伶集講筵、能嘶竹枝詞、供養繩床禪」とあるによって解してみた。(9)「言言」次句の「默默」と対し、(12)に仏教

への親近をいうところから、むなしい狂言綺語のみ多い、の意であろうが、『詩經』大雅「皇矣」「崇墉言言」の伝に「高大也」、箋に「猶言擊壁、將壞貌」とあるのを意識しているのではないか。

になると、事態はもつと悪化し、「自惜」では、雪文字・鏡精神と詩の孤高を誇ってはみるが、沈黙に就けずことばの山のみ積み上げる己れの業は虚しいものとされ、儒の誤り・仏乗への近親が語られる。賈島は「冰凌に臥す」ことによって、その嘲詠に鋭い金痕を与えることができたのだが、この「風雅」老いたる晩年を抱く氷は、もはや詩を生むエネルギーには転化しえない。「秋懷十五首」其六の「時壯昔空説、詩衰今何憑 時壯んなりと昔し空しく説く、詩衰へて今何にか憑らん」・其十四の「詩老失古心、至今寒皚皚 詩老古心を失ひ、今に至るまで寒皚皚たり」という述懐も、同じ詩的エネルギーの衰弱を訴えている。

懊惱⁽³¹⁾

- 1 悪詩皆得官 悪詩は皆な官を得
- 2 好詩空抱山 好詩は空しく山を抱く
- 3 抱山冷殞残 山を抱けば冷たきこと殞残として
- 4 終日悲顔顔 終日 悲しみ顔顔たり
- 5 好詩更相嫉 好詩 更ごも相ひ嫉み
- 6 劒戟生牙關 劒戟 牙関に生ず
- 7 前賢死已久 前賢 死して己に久しきも
- 8 猶在咀嚼間 猶ほ咀嚼の間に在り

- 9 以我殘抄身 我が殘抄の身を以つて
10 清峭養高閑 清峭もて高閑を養はん
11 求閑未得閑 閑を求むるも未だ閑を得ず
12 衆諍眞虺虺 衆諍 眞りて虺虺たり

〈大意〉 悪しき詩はみな官職を手に入れ、好き詩は空しく山を抱く。山を抱く身は凍え死なればかり、終日悲しみが聳え立つ。そのうえ好き詩はたがいに憎みあい、齒のあいだから劍がとびだしてくる。昔の賢者は死して久しいが、その好き詩はいまなお私によってかみしめられている。先の短い老残の我が身だが、清らかな險しきで、高い閑寂さを涵養しよう。だが、閑寂さを求めてもそれは得られない、人びとの悪口が怒りたけて襲いかかるのだ。

〈注〉 (3) 「殘殘」底本・弘治本・毛本は「殭殘」に作るも、字書類に見えぬ字である。全唐詩・華忱之校本に従う。全唐詩は「音擊、寒貌」と注するもとづくところを知らない。「困病欲死狀」という『辭海』に従う。(4) 「顔顔」他に用例を知らぬが、「屏顔」の顔で、高峻の貌であろう。(9) 「抄」底本・弘治本は「抄」に作る。全唐詩・華忱之校本に従う。(12) 「虺虺」『説文』「虎怒也」

これが、彼の詩が立たされた情況である。「悪詩皆得官、好詩空抱山」とは、詩に巧みなことを必須とした唐代の科擧に対する痛烈なあてこすりといえよう。好き詩こそ好き官を得るにふさわしいという制度の立て前と、まさにかさまなのが現実である。それだけなら、孤高に絶るといふ自己満足の手もあるが、その好き詩同志が陰險に憎みあっているのだ。前賢の遺産に清峭という甲羅に似せた穴を掘って、孤高の閑寂に身を隠そうとしても、非難の矢——そのなかにはわが好詩を嫉む好詩も含まれているだろう——が降りそそぐ。実際にどういう事情があったのかは不明

だが、好詩からも背かれてしまった彼の詩の孤立は、まったく救いがない。「老恨」や「自惜」のうちはまだよかつたが、ここに至っては、やり場のないむしゃくしゃに「懊惱」と題するほかしかたがあるまい。かくて、内攻する怒りが枯れてゆくと、次のような異様なことばが吐かれるようになる。

偷詩⁽³²⁾

- 1 餓犬齶枯骨 餓犬 枯骨を齶^かみ
- 2 自喫饑飢涎 自ら饑飢の涎を喫す
- 3 今文與古文 今の文と古への文と
- 4 各各稱可憐 各おの可憐を称せらるるも
- 5 亦如嬰兒食 亦た嬰兒の食の
- 6 錫桃口旋旋 錫桃 口に旋旋たるが如し
- 7 唯有一點味 唯だ一点の味有るのみ
- 8 豈見逃景延 豈^{ひかり}に景を逃れて延ぶるを見ん
- 9 繩床獨坐翁 繩床 独坐の翁
- 10 默覽有所傳 默覽 伝ふる所有り
- 11 終當罷文字 終に当に文字を罷め
- 12 別著逍遙篇 別に逍遙の篇を著はすべし
- 13 從來文字淨 從來 文字の淨らかなるは

14 君子不以賢 君子以つて賢とせず

〈大意〉 餓えた犬がひからびた骨をかじり、自分で自分のいじきたない涎をくらっている。現代の文章だ、いにしえの文章だと、それぞれに評判は高いが、赤ん坊が桃の餡を食って、口をべたつかせているようなものだ。ちよっぴりおいしいう味がするだけ、とうてい時間の腐蝕に堪えられまい。縄の床几に一人坐する翁は、彼のみに伝えられたものを黙ってながめる。けつきよくはくたらぬ文字の業など棄て去り、途を変えて逍遙遊の文章を著わさねばならぬ。君子はむかしから、文字のかっこうよさなど評価しなかつたのである。

〈注〉 (6) 「餠桃」劉宋王微に「桃餠讀」(『初學記』卷二十引)あるも、いかなるものか未詳。「旋旋」意を以つて推す。回旋の意から、口のぐるりを流れるさまをいつたものか。(13) 「文字淨」もとずくところがあるとすれば、別のニュアンスになりうるが未詳。

(1) (6) が特に剽竊のことをいっているとはとれないので、「儉詩」なる題は、「詩を儉む」ではなく、「儉かなる詩」あるいは「儉に詩す」と読むべきだろう。今文・古文・文字は、ここでもほとんど詩と読みかえてよい。詩以外に表現を持たぬ孟郊にとって、その他の文学はさしたる関心の対象とはなりえなかつた。さきの「自惜」では、詩という口業への絶望が彼を仏乗へと向かわせていたが、この詩では莊子的な超世が求められているらしい。しかし、詩への絶望からの脱出路が仏であるか道であるかは、さし当つての問題ではない。見るべきは、前半で叩きつけられた詩への全否定のすさまじさである。どの句も嫌味たっぷりだといわねばならないが、特に冒頭二句に込められた憎悪の激しさに、私はいくらか寒けを感じる。餓・枯・骨・饑・涎といった愛用の語を使い、ひからびた飢餓という孟郊一流の自虐的肉体感覚によって、詩作とは不毛な自慰行為にすぎぬと断ずるこの二句には、彼自身の詩作の虚しさに対する

怒りが、己れへとも他者へとも分ちえぬ憎しみと化して、したたかに叩き込まれているにちがいない。(補註)もはや前賢の詩を咀嚼して高閑を養うどころではない。詩史はひっくりくるめてがき、のよだれにすぎず、詩が後世にのこりうる可能性など絶無である。むろんこうなれば虚しき文字の業は棄て去るしかないが、後半のいづくさは傲慢に近い。というのが酷ならば、詩作の全否定から脱出路への跳び移り具合が安易で、現実との軋轢から生じる詩の不幸というものをじつくり詰めてみる努力が放棄されている、といってもよい。この種の精神に対してなら、君は詩をやめるやめるといつていながら、それをねたにして詩を書いているではないか、という皮肉も揚げ足取りにはならないだろう。「終當罷文字」といっても、額面通りには受け取りかねるのである。

詩ではなく、詩人についてうたった次の詩では、孟郊はもう少し別の顔を見せている。晩年の重要な連作の一つで、元和七年(812)六十二才の作とされる「送淡公十二首」(33)は、

- 1 詩人苦爲詩 詩人 苦しんで詩を為るは
- 2 不如脫空飛 空に脱して飛ぶに如かず
- 3 一生空鷲氣 一生 空しく鷲氣のみ
- 4 非諫復非譏 諫に非ず復た譏に非ず
- 5 脫枯掛寒枝 脱枯 寒枝に掛かり
- 6 棄如一唾微 棄てらるること一唾の微かなるが如し
- 7 一步一步乞 一步 一步に乞ふ
- 8 半片半片衣 半片半片の衣

9 倚詩爲活計 詩に倚りて活計を為すは

10 従古多無肥 古へ従り多く肥ゆること無し

11 詩飢老不愁 詩飢 老ゆるも愁へず

12 勞師淚霏霏 師が涙の霏霏たるを勞す

〈大意〉 作詩に苦しむ詩人というやつは、殻を脱け出して空中に飛んでゆく蟬にも劣るといふ存在です(?)。一生むなし溜め息をつき(?)、諷諫するわけでも譏刺するわけでもありません。枯れ枝にひっかかったひからびた脱け殻といたところで、一吐きの唾ほどにしがなく棄てられるのです。一足一足物乞いして歩き、あちらで半切れ、こちらで半切れと衣服を頂戴します。むかしから詩をてだてに飯を食おうとした人間が、栄養満点だったという話はあまり聞きませんね。しかし、どんなに老いさえばえようと、詩ゆえの飢を悲しみはしますまい。そんな私にむかって、あなたはかくもはらはらと涙を流して下さる。

〈注〉 (2)(5) やや無理かもしれぬが、この二句は蟬のことをいうと解した。詩人は露しか飲まぬ清苦なる蟬にも劣る、というのであろう。(3) 「露氣」未詳。露は、『詩經』塙風「匏有苦葉」「有露雉鳴」の伝に「雌雉聲也」とある。雌雉が雄雉を呼ぶ声であるが、ここではもう一つ落ちつかない。夏敬観『孟郊詩選注』は、この連作中の他の語と同じく、越中の俗語ならんというも、いかがか。「秋懷十五首」其十三に「露露伸至明」とこの字を用いているのと考え合わせ、呻き声・溜め息のことと解しておく。

とうたう其十二で結ばれている。詩人の生涯に飢えはつきものだというこの一首の主題は、先立つ其十一に、江南に遊ぶ同郷の友淡公から置き去りにされた自分が、すでに死んだ詩友たちと同じく餓えに死ぬことになるのではないかという恐れを、

意恐被詩餓 意に恐る 詩餓を被らんかと

欲住將底依 住まらんと欲するも 將た何にか依らん

盧殷劉言史 盧殷 劉言史の

餓死君己噫 餓死せるを 君 己に噫けり

とうたうのをうけてさらに展開させたものである。この一首のことは、やはりはなはだ苦いものではあるが、「老恨」から「偷詩」に至る独自の詩に比べれば、気のおけない詩友という對話の相手の存在が、いくらか感傷的になると同時に、もう少し醒めた眼で己れの詩人としての運命を見つめさせる余裕を与えているといえる。(1)(2)は必ずしも生活的な苦しさのみをいうのではあるまい。詩とは苦しい仕事であり、どこにも脱出の途はない。「懊惱」や「偷詩」のような詩を作らずにいられないとすれば、苦しくないわけがないだろう。だが、ここで孟郊は、そのような困難を対象化することによって、救いのない絶望や憎悪からある程度解放され、逆に詩人であるかぎりには仏にも道にも脱出できない自己を見ているといえる。彼の一生は、ただ情ない吐息をつきつつ(？)、社会的効用ゼロの詩を作りつつけることではない。孟郊に諷諫への積極的言及が乏しいことはすでに述べたが、ここではそれが否定型で出てくる。もちろんこれは自嘲の語であるから、世間から諷諫と評価されないことをいっているのだととも誤りではないが、やはり、諷諫をよしとしながら、諫にも譏にもなりえぬ己れの苦しみだけを掘ってゆくことになってしまふ、という自己認識をも含むことばであると感じられる(ただ、「驚氣」がわからないので、この微妙なところは確定できない)。かくして見棄てられた存在となることは必然だが、それでも詩人として食うしかないとすれば、当てのない物乞いをつづけ、飢えるほかないだろう。そして、彼はその途を選択し、詩による飢を甘受する、といい切る。これが孟郊画くと

ころの、詩人というものの自画像である。自己のみに向いあって、詩への絶望と怒りを不毛化させるとともに、仏なり道なりという抜け路を求めずにはいられなかった一端と、飢えた詩人として老いてゆくしかないという諦めとも覚悟ともいえる一端と、資質と境遇の不可避なからみあいによって存分にその孤癖を飼い太らせたあげくに晩年の孟郊がたどりついた心境は、この両端のあいだに広がっていたわけである。——いい落したが、これまで引用したもつとも孟郊らしい〈詩の詩〉は、ことごとく晩年の作であった。そして、晩年の多作は、けっきょく彼の選択が後の一端にあったことを示しているといえよう。

自己に即したこの詩ほどに全面展開はされていないし、当然自嘲的な自己認識は含まれないが、其十一にうたわれた二人の詩友劉言史と盧殷⁽³⁴⁾の死を悼む詩にも、同じような詩人の運命が語られている。

詩人業孤峭 詩人 業 孤峭にして

餓死良已多 餓死すること良に己に多し

相悲與相笑 相ひ悲しむと相ひ笑ふと

累累其奈何 累累たるも其れ奈何んせん 「哭劉言史」⁽³⁵⁾

詩人多清峭 詩人 多くは清峭なり

餓死抱空山 餓死して空山を抱く 「弔盧殷十首」其⁽³⁶⁾一

いずれも詩の冒頭、特に後者は、孤独な詩人の死を歎き、若き日からの交際を追憶し、世人の無情さを憤り、故人の徳を称えて結ぶ十首の連作の開頭の句であり、この句に強いアクセントを置いて全篇が打ち出されている。「峭」|| 瘦せて鋭い險しき、によって、詩人の内と外を一括して捉える風格の規定、餓え、空山を抱くという表現、すべてが

すでになじみのものである。だが、なぜ詩人の生は詩飢で、その死は餓死でなければならぬのだろう。彼らが窮乏のうちに死んだのは事実だとしても、なぜ窮死とか、それに類する死であつてはいけないのか。唐詩の「餓死」は、日本語の「餓え死に」と必ずしも同義ではなく、腹を空かせたまま死ぬ、くらしいの意味まで含みうることばであるかもしれないが、それにしても、君たちの腹の空き方はいったいどの程度のものであったのかね、と聞きたくなる人はいるにちがいない。しかし孟郊には餓死とか詩飢とか書かねばならぬ彼なりの必然性があつた。先にも一言しておいたように、精神的な痛みを身体に転移させるといふのが、孟郊の独自の詩的方法なのであつて——このことの意味については次節以下で触れる——、この方法が困窮を対象とするなら、生活と身体がもっとも鋭く交叉する一点である飢餓が引き出されてくるのは当然であろう。このやり方は、生活的なものに向う場合、その広がり of 全域を視野に入れることを忌避するために採用されている気配があるだが、困窮を餓えという一点にしぼつた衝撃力——特に詩の冒頭における——は評価しうる。

それよりも、「送淡公十二首」其十二・「哭劉言史」「弔盧殷十首」其一において重要なのは、すべてに「詩人」の語が使われていることであると思う。いったい、「詩人」ということは「詩経のうたびと」の意のみではなく、poet を意味する普通名詞としても用いられるようになったのは、いつごろからか。このことについてはすでに指摘している論者があるかもしれないが、不勉強の私は気付いていない。ただ、索引類によつて調べてみると、この意義の拡大が起つたのは盛唐から中唐にかけてであるらしく、中唐ではかなり一般化しているらしい。それ以前で poet を意味する語としては、「詞人」「詞客」がもっとも代表的なものであるろう。これらの語及び「詩」についての充分な実証なしに確言することはできないが、この変化に、詩人とは単に六朝風の巧緻華麗な詞藻を綴るだけの者ではなく、

思想的な背骨を具えた存在でなければならぬとする、盛唐以降の詩人たちに共通の詩に対する構えを予想しても、それほど見当違いではなさそうに思われる。

それはともあれ、孟郊に関するかぎりであれば、詩人を意味する語として、「詞客」が一回だけ用いられているほか、すべて「詩人」を使っている。「詩人」は五回、もっとも早い使用は貞元二十年(804)五十四才の「招文士飲」に「詩人命屬花」というもの、あとは上記三首が、それぞれ、「弔盧殷十首」が元和五年(810)六十才、「送淡公十二首」が元和七年、「哭劉言史」が元和六・七年以後、残る一首「嚴河南」に、「詩人偶寄耳、聽苦心多端」とうたうのが元和五年であって、晩年の作ばかりである。それも、漂陽尉時代の作とされる「招文士飲」では、あたかも山陽令に貶されていた韓愈や李白の境涯を思いやり、牢騷の言を発してはいるものの、文士を飲に招くという作詩事情から、「詩人命花に属す」と、かなり気取った発想をしており、上記三首の切実さからは遠い。しかし、孟郊の「詩人」が初回からその運命と結びついていたことは注意しておいてよいだろう。「詞客」の方は、汝州刺史であった陸長源のもとに身を寄せていた貞元九年(793)四十三才頃、やはり宴集での作である「夜集汝州郡齋聽陸僧辯彈琴」に、「康樂寵詞客、清宵意無窮」と使用され、これは、パトロンの陸長源を謝靈運に見たてた、平凡な挨拶のことばにすぎなかった。元和五年の「嚴河南」は、この年河南県令として長安から洛陽に赴任した韓愈を喜び迎えて一夕の飲に誘った詩であり、詩人の運命を語るものではないが、上に引いた一聯の前には、「苦竹聲嘯雪、夜齋聞千竿」とうたわれ、苦竹の声に耳を捉えられる詩人は、すでに、「聴くこと苦しくして心多端」な晩年の苦さを存分に噛みしめている。年老いるに従って個性的な寒苦なスタイルを確立し、作品量も豊富になってゆく、明らかに晩成の詩人であった孟郊の意識に、その詩的成熟とともに、「詩人」といわずにはどうしても落着きが悪い、といった種類の詩人像が出来上っている。

たのだといえる。

一方、彼は自分のことを「詩老」「詩叟」と呼ぶ。元和元年(806)五十六才の「會合聯句」に「詩老獨何心」と使うのが、恐らくもっとも早いであろうが、この「詩老」は韓愈を指し、他人をいった唯一のケースである。この「詩老」「詩叟」といういい方も、詩以外に老年の生の証しを見出すことができなくなっていた孟郊の、「詩飢老ゆるも愁」えぬ自覚から生まれたものといえるだろう。「秋懷」其十四の「詩老失古心、至今寒皚皚」は、老残の自己意識に徹している点で、そのことをよく示している。ただし、ほかの例では、挨拶応酬の場に用いられ、むしろ「詩人」というほどには普遍化することのできない対他意識が込められているようだ。

何人は花侯 何人か是れ花侯ならん

詩老強相呼 詩老 強ひて相ひ呼ばん 「選人賞薔薇」

詩叟未相識 詩叟 未だ相ひ識らず

竹兒爭見君 竹兒 争ひて君を見ん 「寄洛州李大夫」

など。⁽⁴³⁾

つまり、「送淡公十二首」其十二で、己れを「詩老」「詩叟」でなく「詩人」と呼んだとき、孟郊は盧殷・劉言史と彼自身とを一括して、そこからある普遍的な詩人の運命に対する認識を引きだそうとしているのである。むしろそれは、「弔虞殷十首」其四のことによるなら、「吟哦無滓韻、言語多古腸 吟哦に滓韻無く、言語に古腸多し」——〈古〉なる精神より発する故に詩風は清潔、従って徹底した被疎外者として〈峭〉しく瘦せ鋭り、「至親唯有詩、抱心死有歸 至親唯だ詩有り、心を抱きて死に帰するところ有り」——己れの詩のみを理解者として孤高の死を迎えねば

ならぬ、要するに、詩に餓えて死する者というにであった。悪詩は問題外、好詩にしてなお嫉みあわねばならぬとすれば、好詩のなかの好詩をうたう〈詩人〉の生と死にこれ以外の在り様は考えられない。彼が己れのほかに、「餓死」によって自らを見事に完結させてしまった死者にしか〈詩人〉の名を奉れなかったのも当然というもので、韓愈などは、あらゆる意味で孟郊の〈詩人〉のなかに数えてはもらえなかったにちがいない。

その韓愈に、文は窮してのち工となるの説があったことは、よく知られている。⁽⁴⁴⁾「夫れ和平の音は淡薄にして、愁思の声は要妙なり。謹愉の辞は工にし難くして、窮苦の言は好くし易きなり。是の故に文章の作恒に羈旅艸野に発す。王公貴人の氣満ち志得るが若きに至りては、性能くして之を好むに非ざれば則ち以て為るに暇あらず」(荆潭唱和詩序)⁽⁴⁵⁾「然れども子厚斥けらるること久しからず、窮すること極らざれば、人に出でたること有りと雖も、其の文学辞章、必ず自ら力めて後に伝はるを致すこと今の如く疑ひ無きこと能はざるべし。子厚をして、願ふ所を得て一時に將相為らしむと雖も、彼れ以て此に易ふれば、孰れか得孰れか失、必ず能く之を弁つ者有らん」(柳子厚墓誌銘)⁽⁴⁶⁾。自分の氣に入った文章であればあるほど、他人の氣に入らず、止むをえずに綴った俗文で、自己嫌悪を感じるようなものほど喜ばれる、「古文直に何ぞ今の世に用ひられんや」(與馮宿論文書)⁽⁴⁷⁾と、世人の無理解を憤りつつ新しい文章を創出しなければならなかった体験が、韓愈に、新興士人層の憤懣や疎外感が詩文に転化する経緯を、ある痛みとともに把握したこの種のことばを書かせたのであることは、うたがいない。

しかし、智窮・学窮・命窮・交窮と並べて文窮を挙げ、追い払おうとした窮鬼たちから、信じられなければ詩書に聞いてごらんと、百世に伝わる名声を保証してもらおう「送窮文」⁽⁴⁸⁾の、余裕綽々たる運命への安住ぶりは、〈詩人の詩〉〈詩人の詩〉をうたう孟郊のつきつめた表情からは、およそ遠い地点にあった。秀れた文学は困窮によってはじめて

購われる、という認識は、明らかに、詩と窮苦との動きがとれない相互呪縛に陥ってゆく生から見ると、遙かにゆとりのある場所からする冷静な客観的視線であり、さればこそ、この認識の裏に滲む、文学によって困窮は償われもするのだ、という慰藉には、真に窮していない者の気らくさが臭いもしたはずである。韓愈が相当に地位も進んだ元和十一年の、同僚との応酬の作である「和席八十二韻」⁽⁴⁹⁾を、孟郊の〈詩人の詩〉と同じ平面で比較するわけにはゆかないかもしれないが、この詩の「多情懷酒伴、餘事作詩人 多情にして酒徒を懐ひ、余事として詩人と作る」のように、閑雅な文事に耽る者を「詩人」の語によって呼ぶことは、晩年の孟郊には考えられなかったところであろう。孟郊の〈詩人〉は、窮してのち工なのではない。後とか前とかは問題にならない。詩人であること即窮であり餓なのであり、そのような運命を担う生にして、はじめて〈詩人〉と呼びうる存在なのだ。餓死した詩人に対しては、「相悲與相笑、累累其奈何」——同情の涙も冷笑も、まったく無意味である。〈詩人〉とは、社会的疎外の極限的形体であり、その疎外感を噛みしめるようにして確認することが、彼の〈詩の詩〉〈詩人の詩〉にはかならない。

社会的疎外とはいっても、むしろその「社会」は、士大夫のそれを一步も出るものではない。孟郊の詩と詩人が、身動きのとれない孤絶と不毛な怒りに陥るのは、彼が社会的な自己展開に絶望しながら、なおかつ正統的な価値観——彼においては、それは〈古〉の観念に集約される——と、かかる価値観を実現すべきはずの社会的存在である士人の世界をあくまで前提として引つ被つていたからである。何も〈人民〉の側に移行するなどという不可能事が必要だったわけではない。また、寒山のように、士大夫の世界から脱出した空間で、お前さんたちの愚劣な詩より、おれの詩の方がよっぽど御利益があるよ、と嘯く途しかなかったわけでもない。この世界を相手にしながら、恐らく詩人の不幸などは承知の上で、詩の芸術性にすべてを賭けるという賈島のような行き方をするなら、少くとも、社会∥倫理

的な孤立と詩の孤立を直通させて、不毛な憤りと絶望のなかで堂々廻りする苦しみからは脱出できなかったはずであった。

二句三年得 二句 三年にして得

一吟雙淚流 一吟して雙淚流る

知音如不賞 知音 如し賞さざれば

歸臥故山秋 歸りて故山の秋に臥さん⁽⁵¹⁾

とか、

三月正當三十日 三月 正に當る三十日

風光別我苦吟身 風光 我が苦吟の身に別る

共君今夜不須睡 君と共に今夜睡るを須ひざらん

未到曉鐘猶是春 未だ曉鐘に到らざれば猶ほ是れ春なり 「三月晦日贈劉評事」⁽⁵²⁾

とかいう賈島の苦吟の姿には、たしかに高橋和巳のいうように⁽⁵³⁾、現実と詩の価値を転倒した至上主義者ならではの不安と苦痛がうかがわれるが、それは、詩を作ることが無媒介に社会的な虚しさとなつてはね返ってくる孟郊の不幸に比べれば、詩人としてはるかに恵まれた不幸であるといえるだろう。

一日不作詩 一日詩を作らざれば

心源如廢井 心源 廢井の如し

筆硯爲轆轤 筆硯を轆轤と為し

吟詠作縻綆 吟詠を縻綆と作す

朝來重汲引 朝來 重ねて汲引すれば

依舊得清冷 旧に依りて清冷たるを得たり

書贈同懷人 書して同懷の人に贈る

詞中多苦辛 詞中に苦辛多し 「戲贈友人」⁽⁵⁴⁾

とうたう賈島の「苦辛」は、一日として詩作を怠ることを許さぬ詩の呪縛的な自己回転から生まれるものだったが、しかし他ならぬその日々の詩作のたびごとに獲得される精神の「清冷」さは、充分に「苦辛」を償ってくれたはずである。⁽⁵⁵⁾

ここで当然、美の陥穽ならぬ、孟郊の社会||倫理意識の陥穽と、その核心をなす「古」の觀念について語らねばならないところであるが、あまりに長くなるので、次節以下の作品論のなかで触れることにしよう。

以下、孟郊の作風をもっともよく代表する晩年の連作詩「秋懷十五首」「寒溪九首」⁽⁵⁶⁾「峽哀十首」「杏塲九首」を中心に、必要に応じて他の作品にも言及しつつ、この老残と窮苦の詩人が、いかなる発想とイメージを持つ詩的世界を構築しなければならなかったかを考え、終節で中唐詩人たちのなかにおける孟郊の位置について簡単な見取図を引いておきたい。今回は紙数の都合から、まず、彼の老残の意識と自然像の特色がきわめて鮮明に観察できる「秋懷」について述べることにする。

孟郊の詩の底本には、景宋本『孟東野詩集』（民国二三年陶湘による黄氏士礼居旧藏宋本の影印本を、さらに一九六七年大安書店が影印したもの）を用い、明弘治刊本『孟東野詩集』（『四部叢刊初編』に影印、弘治本と略称）・汲古閣刊本『孟東野集』（民国一五年涵芬楼影印『五唐人集』所収、毛本と略称）・『全唐詩』孟郊卷（揚州詩局本第六函第五冊）・華忱之校訂『孟東野詩集』（一

九五九年人民出版社刊)を参照した。孟郊の行実及び作品の繫年に関しては、特に断らないかぎり、華氏の『孟郊年譜』(上記『詩集』に附す)及び『孟東野詩文繫年考證』(民国三〇年編者油印)に従う。なお『孟東野詩集』よりの引用は書名を略し、巻数のみを注する。

- (1) 卷四
- (2) 卷十
- (3) 錢仲聯集釋『韓昌黎詩繫年集釋』28頁。以下韓愈の作品の引用は、詩はこの錢氏の書、文は馬茂元校注『韓昌黎文集校注』により、それぞれ『錢本』『馬本』と略称して頁数を記す。
- (4) 『錢本』231頁
- (5) 『醉留東野』
- (6) 『馬本』256頁「及其爲詩、劇目毓心、刃迎縷解、鉤章棘句、摛擢胃腎、神施鬼設、間見層出、唯其大玩於詞、而與世抹殺、人皆劫劫、我獨有餘、有以後時開先生者、曰、吾旣擠而與之矣、其猶足存邪」
- (7) 「於戲貞曜、維執不殆、維出不嘗、維卒不施、以昌其詩」
- (8) 李翱「薦所知於徐州張僕射書」(『李文公集』卷八)・劉又「答孟東野詩」(『全唐詩』詩局本(以下同じ)六函七冊)・賈島「哭孟郊」(『長江集』卷三)「弔孟協律」(『長江集』卷三)など。
- (9) 『全唐詩』五函五冊「王建」五。『長江集』卷十にはこの一首を賈島の詩として収め、『全唐詩』は王建・賈島それぞれの巻に兩出する。『唐音統籤』に依って王建詩とする華忱之「孟郊遺事」(華氏校訂『孟東野詩集』に附す)の説に従う。
- (10) 「書李賀小傳後」(『甫里先生文集』卷十八)「吾聞淫敗漁者、謂之暴天物、天物卽不可暴、又可挾摘剗削、露其情狀乎、使自萌卵至於槁死、不得隱伏、天能不致罰耶、長吉天、東野窮、玉溪生官不挂朝而死、正坐是哉、正坐是哉」
- (11) 「薦士」で韓愈が李白・杜甫についていうことは、「勃興得李杜、萬物因陵暴」

(12) 趙璘『因話錄』『孟詩韓筆』条「韓愈能古文、孟郊長於五言、時號孟詩韓筆」

(13) 卷十

(14) 注9に同じ。但し其二を別人の作とする書はない。

(15) 其五「此誠天不知、剪棄我子孫」

(16) 『歐陽文忠公集』卷二。詩題は「讀李白集効其體」に作る。

(17) 『東坡集』卷九「夜讀孟郊詩、細字如牛毛、寒燈照昏花、佳處時一遭（中略）初如食小魚、所得不償勞、又似煮蟪蛄、竟日嚼空螿、要當鬪僧清、未足當韓豪、人生如朝露、日夜火消膏、何苦將兩耳、聽此寒蟲號、不如且置之、飲我玉色醪」

(18) 「祭柳子玉文」(『東坡集』卷三十五)

(19) 「五十以後、因暇日試取細讀、見其精深高妙、誠未易窺、方信韓退之李習之尊敬其詩、良有以也、東坡情痛快、故不喜郊之詞艱深、要之孟郊張籍一等詩也、唐人詩有古樂府氣象者、惟此二人、但張籍詩簡古易讀、孟郊詩精深難窺耳」

(20) 一々の評語について原文の引用は略す。弁護論のそれとともに、手輕には、臺靜農編『百種詩話類編』上「作家類、個別作家」の孟郊の項を参照されたい。

(21) 『清詩話』所収。「孟東野奇傑萬不及韓、而堅瘦特甚、譬之偃陽之城、小而愈固、不易攻破也、東坡比之空螿、遺山呼爲詩囚、毋乃大過」。小城で堅固だった偃陽の故事は、『左傳』襄公十年に見える。

(22) 卷六

(23) 『遺山先生文集』卷十一

(24) 卷六

(25) 卷六

(26) 卷八

- (27) 卷三
- (28) 卷九
- (29) 卷三
- (30) 卷三
- (31) 卷四
- (32) 卷三
- (33) 卷八
- (34) 盧殷については韓愈「登封縣盧殷墓誌」(『馬本』211頁)が、劉言史については皮日休「劉蕤強碑」(『皮子文藪』卷四)がその生平を伝える。なお劉言史には孟郊に贈った「初下東周贈孟郊」「與孟郊洛北野泉上煎茶」の二詩がのこされている(『全唐詩』七函九冊)。
- (35) 卷十
- (36) 卷十
- (37) 『文選』・王維・杜甫には Poet の意で「詩人」を用いた例はなく、李白にこの意味に用いたと思われる二例が発見される(「遊水西簡鄭明府」「鄭公詩人秀、逸韻宏寥廓」・「送楊山人歸天台」「詩人多見重、官燭未曾然」)。王維が自らを語った句としてよく知られた「宿世謬詞客、前身應畫師」(「偶然作」其六)でも、詩人である自分を「詞客」と呼んでいる。もしこの点について詳論が行われていないとすれば、かなり射程の大きな問題であると思うので、別に論じなければならない。
- (38) 卷四
- (39) 皮日休「劉蕤強碑」によれば、劉言史の死はこのころである。
- (40) 卷六

(41) 卷五

(42) 『錢本』 185頁

(43) 以上挙げた他に、詩老には、「至孝義渡寄鄒軍事唐二十五」の「岸亭常四週、詩老獨一家」、詩叟には、「憑周況先輩於朝賢乞茶」の「曾向貴人得、最將詩叟同」がある。

(44) 羅根澤『中国文学批評史』第四編第七章四「不平則鳴」與「文窮益工」に、韓愈のこの種の発言がまとめられている。

(45) 『馬本』 153頁「夫和平之音淡薄、秋思之露要妙、謹愉之辭難工、而窮苦之言易好也、是故文章之作、恆發於羈旅草野、至若王公貴人氣氣滿志得、非性能而好之、則不暇以爲」

(46) 『馬本』 294頁「然子厚斥不久、窮不極、雖有出於人、其文學辭章、必不能自力以致必傳於後如今無疑也、雖使子厚得所願、爲將相於一時、以彼易此、孰得孰失、必有能辨之者」

(47) 『馬本』 115頁

(48) 『馬本』 328頁

(49) 『錢本』 423頁

(50) 「寒山詩」二八一・二九七・三〇六、「拾得詩」一六など（数字は入谷仙介・松村昂『寒山詩』（禪の語録13）の作品番号）。

(51) 魏泰『臨漢隱居詩話』に、賈島が「獨行潭底影、數息樹邊身」（送無可上人）の領聯の一聯に自ら注した詩として引く。

(52) 『長江集』 卷十

(53) 高橋『詩人の運命』第一章

(54) 『長江集』 卷二

(55) 孟郊と賈島の詩風の違いを賈島の側から論じたものに、荒井建「賈島」（中国文学報第十冊）があり、すぐれた概括を行っている。ここでは両者の詩に対する意識の対比について簡単に触れるにとどめ、作品全般の比較は続稿に譲る。

(56) 卷五

二 「秋懷」

論述に先だつて、まず「秋懷十五首」の注釈を行う。すでに注記したように、底本には大安影印の宋本を用い、弘治本・毛本・全唐詩・華忱之校訂本を参照する。ただし校勘は最少限にとどめ、底本の本文を改めた場合と、底本に夾注がある場合にかぎってこれを記す。できるかぎり底本の本文に従つて読むことに努めたが、二三止むをえず改めたところがある。

孟郊の詩は、発想・用語がきわめて独特な上に、従来日中を通じて注釈を加えたものが乏しく、はなはだ読みにくい。成書としては夏敬觀『孟郊詩選注』（『萬有文庫叢要』）を知るのみであるが、選ばれた詩数は約八十首、注も簡略で、かつ首肯しがたい個所が少くない。多くの疑問を存したまま印刷に付することは、無責任の謗りを免れまいが、敢えて試釈を呈して大方の批正を仰ぎたい。

注では、主要な語句について、他の詩人の用例があるか否かを調査した。もっとも、私には、現在利用しうる『文選』・王維・李白・杜甫・韓愈・李賀・杜牧の一字索引及び『佩文韻府』（『韻府』と略称）によるという安直な方法に頼る能力しかない。「未見」と注するのは、上記索引類のすべてに見出されない語であり、かつ特に用例の多い二三の例を除いて、上記索引類に見える用例のすべてを引用しておいた。これをもって孟郊の用語の特殊性を云々するには、なお根拠が不充分というほかないが、一応の目安にはなるであらう。断言することは無理であるが、頻出する「未見」の語中には、孟郊の造語が相当数含まれていると思う。

秋懷十五首

其一

1 孤骨夜難臥 孤骨 夜 臥し難し

2 吟蟲相唧唧 吟虫 相ひに唧唧たり

3 老泣無涕洟 老泣 涕洟無く

4 秋露爲滴瀝 秋露 爲めに滴瀝たり

5 去壯暫如剪 去壯 暫かなること剪るが如く

6 來衰紛似織 來衰 紛として織るに似たり

7 觸緒無新心 緒に觸るるも新心無く

8 叢悲有餘憶 悲しみ叢がりて余憶有り

9 詎忍逐南帆 詎んぞ忍びん 南帆を逐ひ

10 江山踐往昔 江山に往昔を踐むに

〈大意〉 孤独な肉体を横たえる気にもなれぬ夜、虫どもは忍び音に鳴きかわしている。涙も鼻汁も乾いて老いさらばえた泣き声のみ、秋の露がかわりにぼたぼたと滴つてくれる。壮年の精力は刃物で断ち切る如く瞬時に消え去り、來襲する老衰は織るように繁多だ。何に触れても新鮮な心の動きはおこらず、むらがり集る悲しみのうちに追憶ばかりがあり余る。南に向う船の帆を追い、江南の山河に若き日のわが足跡を尋ねようという気にはとてもなれない。

〔注〕 (1) 「孤骨」未見。以下この連作に「老骨」「病骨」「古骨」の語が見えるほか、孟郊は多くの詩に「骨」の字を用いる。その意味については本文に述べる。(2) 「吟蟲」珍らし語とは思われないが、『韻府』に梁簡文帝「秋闈夜思」の「吟蟲繞砌鳴」を引くのみ。「唧唧」古樂府「木蘭詩」の「唧唧復唧唧」に、『樂府詩集』は「一作、促織何唧唧」と異文を注するが、中唐までは、虫声を唧唧といった例は少ないようである。同時代では、白居易「江夜舟行」「啼秋唧唧蟲」

など。もちろん、虫声に歎息の音を聞いている。「相」は、おそらく、虫がたがいに鳴きかわっているのであって、詩人にむかって、ととる必要はないだろう。(3)「老泣」未見。(5)(6)「去壯」「來衰」未見。「壯去」「衰來」の形でも見えない。孟郊の特徵的な造語法による、修飾構造の新語であろう。この種の造語については本文参照。(7)「觸緒」後世では習見の語と思うが、彼以前の用例未見。『韻府』に令狐楚の表を引くのみ。「新心」これも、何でもない語のようであるが、『玉臺新詠』卷一の「古詩八首・悲與親友別」に「念子棄我去、新心有所歡」とあるを知るのみ。(8)「叢悲」未見。「悲叢」の形でも見えない。「觸緒」との対で、生起(もしくは動賓)関係ととっておく。(餘憶)盧象「八月十五日象自江東止田園移庄慶會未幾歸汶上小弟妹尤嗟其別兼賦是詩三首」其三(王維の作ともされる。「別弟妹」其二)「淚盡有餘憶」。下にも「餘噫」「餘鬱」が見えるが、これらの「餘」が、「のこった」の意か「ありあまる」の意か、あるいは双方を兼ね含むかは、にわかには定めがたい。これも、単なる追憶の意ではあるまい。(9)(10)江南は孟郊の郷貫(湖州武康)の地であり、貞元七年四十一才で応試のため長安に上るまでの足跡は多く江南に印され、この間、湖州・上饒で陸羽と、湖州で皎然と、蘇州で韋應物と交わっている。また、貞元九年四十三才再下第の後、貞元十一年四十五才三たび応試のため上京するまでの間には、湖北から洞庭・湘水に赴き、貞元十五年四十九才には、蘇州から越中に遊んでいるらしい。晩年の孟郊は、「送淡公十二首」をはじめ、多くの詩に江南への追憶を語る。また、この頃は常州義興の地に莊園を持ち、近親者が住んでいた。なお、この二句は、「詎忍」が下句をも領する流水に読むべきであろう。

其二

1 秋月顔色冰 秋月 顔色冰り

2 老客志氣單 老客 志氣單なり

3 冷露滴夢破 冷露 夢に滴りて破り

4 峭風梳骨寒 峭風 骨を梳りて寒し

5 席上印病文 席上 病文印しよされ

6 腸中轉愁盤 腸中 愁盤しよ転ず

7 疑懷無所憑 疑懷 憑る所無く

8 虚聽多無端 虚聽 多く端無し

9 梧桐枯崢嶸 梧桐 枯れて崢嶸たり

10 聲響如哀彈 声響 哀彈の如し

〈大意〉 秋月の色は氷りついて身に迫り、老いた男の気力は頼りない。冷たい露がしたり落ちて夢は破れ、けわしい風がひやりと骨をくしけずる。寝こぎに浮き出た文様は病的だ、はらわたのなかを愁いの皿が回転する。疑い深い心には何も頼りにならず、ありもしない物音がかりが虚耳に入りこむ。そそり立つ梧桐の枯枝は、哀しい琴の音のように高く鳴り響く。

〈校〉 (1)〔氷〕底本注云去聲

〈注〉 (1)〔顔色〕杜甫「秋雨歎三首」其一「堦下決明顔色鮮」吉川幸次郎注「今の中国語の yānse、いろ」(『杜甫』)(『世界古典文学全集28』)。ここも同じであろう。「城南聯句」の孟郊の句「是節飽顔色」の場合も、「かおいろ」ではない。

〔氷〕底本以下諸本みな「去声」の注あり。下平蒸韻の「こおり」「こおる」に対し、去声徑韻は「冷迫也」(『集韻』)。

ただし『廣韻』には徑韻の氷を載せぬ)の意という。特に、身に迫る加害感を読み取れ、という作者のこゝろ書きである。ある。 (2)〔單〕この語を「たよらない」という心理的な意に用いた前例は未見。李賀に「客枕幽單看春老」(『仁和里雜敍皇甫湜』)の例あり。ただし、ここは「盡きる」の意である可能性もなしとしないだろう。 (4)〔峭風〕未見。本来山

が高くけわしいことをいい、また人格の峻厳さをもいう「峭」という形容詞が孟郊愛用のものであることは、すでに前節に引いた詩中の、詩人の風格、詩風を表現する「清峭」「孤峭」「峭病」等の語によって明らかであろう。他の用例を一つだけ引けば、前節で触れた「嚴河南」は、冒頭韓愈の人格・文章を称えて「赤令風骨峭、語言清霜寒」という。この字は、『文選』で10回使用されるうち、特殊な3例を除けば、すべて山のけわしさをいい、王維(1)李白(3)杜甫(2)も同様である。韓愈には人格について「風骨峭峻遺塵埃」(「感春五首」其四)という例があるが、この「峭峻」は『漢書』『後漢書』を出典とする双声の語である。「峭風」「峭病」のような修飾構造の語は、孟郊の新造になるものだろう。内と外の尖锐な対峙を好む孟郊の言語感覚をもっともよく示す語といえる。この一句、恐らくファースト・ハンドのイメージであり、彼の被害感覚を代表する詩句である。(5)〔病文〕未見。簟席の文様を病的と見る他の例を知らぬ。これも彼の発見になる像であろう。(6)〔愁盤〕未見。「腸中車輪轉」(古樂府「悲歌」及び『古詩紀』に収める「古歌」)によることは明らかであるが、「愁盤」が転ずる、というのは孟郊の新創であろう。(7)(8)〔疑懷〕〔虚聽〕未見。一般に対象が存在しないのに感官が動くことを「虚」という例も、彼以前の詩にはあまり見当たらない。韓愈「秋懷詩」其五の「虚警」はこれに近いだろう。

其三

- 1 一尺月透戸 一尺 月 戸より透れ
- 2 仵栗如劍飛 仵栗として劍の飛ぶが如し
- 3 老骨坐亦驚 老骨 あながら 坐にして亦た驚ろき
- 4 病力所尙微 病力 ねど 尙ふ所微かなり
- 5 蟲苦貪夜色 虫は苦しくも夜色を貧り

6 鳥危巢星輝 鳥は危くも星輝に巢くふ

7 孀娥理故絲 孀娥 故絲を理め

8 孤哭抽餘噫 孤哭 余噫を抽く

9 浮年不可追 浮年 追う可からず

10 衰步多夕歸 衰步 夕べに帰ること多し

〈大意〉一尺ほどの月光が戸の隙開からさしこみ、きらりと輝いて劍が飛ぶようだ。老残のわが身は、何ということなしにぎくりと物に驚き、病み衰えた気力では、大した期待は持てない。虫どもは苦しげに闇の色を食って鳴きつづけ、鳥は危うげに星の光にたよって巢ごもる。美しいやもめの女が思い出の琴を弾く。しゃくりあげる孤独な泣き声に、ありあまる歎きがひき出されてくる。漂い流れる年月に追いつくことはできない。衰えた足をひきずっていつも夕暮れに帰ってくるばかりだ。

〈校〉(5)〔貪〕底本注云一作含 (7)〔故絲〕底本注云一作煩緒 (8)〔哭〕底本注云一作坐

〈注〉(2)〔乞栗〕孟郊以前には未見。溫庭筠「郭處士擊甌歌」「估栗金蚪石潭古」、陸龜蒙「奉和襲美太湖詩二十首初入太湖」

「耳目駭鴻蒙、精神寒估栗」の「估栗」で、きらりと光るさま、ひやりと冷たいさま、要するに一瞬に緊張を強いる鋭い感覚をいう疊韻の擬態語である。「如劍飛」劍については其六(2)に注する。(3)「老骨」詩に使われた例は未見。

(4)「病力」「老骨」と対に読めば「病み衰えた体力」の意となり、未見。ただし、この一聯は対句ではないから、『漢書』「汲黯傳」「今病力、不能任郡事」(顏師古注「力、謂甚也」)に従って、「病力(はなはだ)しく」である可能性をなしとしない。孟郊の造語癖から、前解に傾く。「所向微」謝靈運「還舊園作見顏范二中書」「微尚不及宣」・「初去郡」「伊余秉微尚」(いずれも『文選』に収める)の「微尚」をもじった表現。謝靈運は孟郊がはなはだ憧憬した詩人だった。

謝の場合は、「山水に遊ぼうとするわが好尚」の意で、「微」は一応の自遜というにとどまるが、孟郊はこれをひっくり返して、「微」に「なまげない」「しけた」といった強い意味を持たせている。(7)〔嬾娥〕『韻府』に楊炯「原州百泉縣令李君神道碑」「竹死城崩、杞婦嬾娥之泣」(『文苑英華』929による)を引くのみ、詩の例は未見。楊炯の例は娥皇のことであり、また「娥」の字面は婦娥を連想させるが、ここは単なる「美女」の意で、「嬾婦」をやや美化していったものであろう。孟郊は己れの孤独を投影して、「看花五首」其五にも「三年此村落、春色入心悲、料得一嬾婦、經時獨垂淚」とうたう。また、「寒溪九首」其二「攀枯聞嬾啼」「嬾啼」は鳥のことであるが、やはり「嬾」の字を用いる。「峽哀十首」其三の「樹枝哭霜棲」の「霜」もおそらく「嬾」であらう。(8)〔孤哭〕未見。〔餘噫〕未見。〔餘〕については其(8)を見よ。一句は、泣くにつれて歎きの声がつぎつぎとひき出されてくる、ということであらうが、「抽」には現代語の「抽泣」の意が含まれているだろう。(9)〔浮年〕「浮生」や「浮世」はごく普通のことではあるが、「浮年」の語は他に見当らない。(10)〔衰歩〕杜甫最晩年の「詠懷二首」其二に「羅浮展衰歩」と見えるのみ。〔夕歸〕未見。(10)はわかるようでよくわからない。「衰歩」なのでいつも帰りが晚くなる、ということか、夜になるのを恐れる、ということか。あるいは、やや突飛だが、「浮年」≡太陽を追いかけついても追いつけず、西に没してしまうので、諦めて帰ってくる、ということか。

其四

- 1 秋至老更貧 秋至れば老いて更に貧しく
- 2 破屋無門扇 破屋 門扇無し
- 3 一片月落床 一片 月 床に落ち
- 4 四壁風入衣 四壁 風 衣に入る

5 疎夢不復遠 疎夢 復た遠からず

6 弱心良易歸 弱心 良に帰り易し

7 商葩將去綠 商葩と去綠と

8 繞繚爭餘輝 繚繞して余輝を争ふ

9 野步踏事少 野步 事を踏むこと少く

10 病謀向物違 病謀 物に向いて違ふ

11 幽幽草根蟲 幽幽たる草根の虫

12 生意與我微 生意 我と与に微かなり

〈大意〉秋がやってきて、老いの上に貧が重なり、破れ家には門の扉もない。ひとひらの月影が寢床に落ち、四方の壁から隙間風が着物に吹きこむ。断えがちな夢は遠くにまでは遊ばず、弱った心はすぐもとに戻りたがる。秋の花と消えゆく草の緑が、庭先をとりまいて残り少ない日の光を争奪しあっている。野人の足は世事に跡み慣れておらず、病中の思わくは何かと喰い違つてばかりいる。草の根方で滅入った声をあげている虫どもよ、お前たちの生命の氣息は、私と同様にたよらない。

〈校〉(7)〔去〕底本注云一作老

〈注〉(3)(4)やや似た詩句に、「西齋養病夜懷多感因呈上從叔子雲」「一床空月色、四壁秋蛩聲」がある。(5)(6)〔疎夢〕〔弱心〕ともに未見、「良易歸」とは、心が積極性を失ったさまであるが、これを「心が帰り易い」という例、他に見えず。二句は、(6)が原因、(5)が結果とも考えられるが、(6)は目醒めに状態についていう、ととっておく。(7)〔商葩〕〔去綠〕とも未見。(8)〔餘輝〕『文選』に陶淵明「詠貧士」「何時見餘輝」あり。「餘暉」ならば、同じく『文選』、王粲「從軍行

五首」其三「桑梓有餘暉・陸機「疑古詩・擬明月何皎皎」「照之有餘暉」(ただしこれは豊富な光の意)がある。(9)〔野歩〕孟郊以前の例未見。それほど珍らしいことはと思われないが、彼以後の例、たとえば許棻の「野歩」と題する五律や、鄭谷「寄懷元秀上人」の「高秋期野歩」など、野外の気ままな散策をいうことが多いらしく、このような劣等コンプレックスを含む用例は特殊なのではないか。(10)〔病謀〕未見。

其五

- 1 竹風相蔓語 竹風 相ひ蔓して語るを
- 2 幽閨暗中聞 幽閨 暗中に聞く
- 3 鬼神滿衰聽 鬼神 衰聽に満ち
- 4 恍惚難自分 恍惚として自ら分ち難し
- 5 商葉墮乾雨 商葉 乾雨を墮し
- 6 秋衣臥單雲 秋衣 單雲に臥す
- 7 病骨可剗物 病骨 物を剗る可く
- 8 酸呻亦成文 酸呻も亦た文を成す
- 9 瘦攢如此枯 瘦 攢りて 此くの如く枯れ
- 10 壯落隨西曛 壯 落ちて 西曛に隨ふ
- 11 裊裊一線命 裊裊たる一線の命
- 12 徒言繫網縲 徒らに言ふ 網縲に繋がる

〈大意〉竹と風が、カチンカチンと打ちあう会話を、暗い寝室の闇のなかで聞いている。鬼神の嘯く声が衰弱した聴覚を満たし、おぼろにまざりあつて聴き分けがたい。枯葉の音は乾いた雨滴が落ちるかと思え、秋衣を着た私は一ひらの雲のようななしとねに身をよこたえている。病み衰えた骨は物が切りとれるほどにとがり、悲痛なりめき声もそれなりにあやあることばとなるのだ。瘦せに瘦せてかくまで枯れば、うすれた西日とともに壮気は落ちてゆく。ゆらゆら揺れる一すじの生命の糸、それが天地の生々の気につながっているのだと、いつてみてもはじまるまい。

〔注〕(1)もちろん実際に、風に揺れる竹の幹が打ちあう音であるが、それを、風と竹が打ちあう、と表現している。其十の「幽竹嘯鬼神」はこと照応する。酸苦な思いをかきたてる夜の竹声は、前節に引いた「巖河南」にも「苦竹聲嘯雪、夜齋聞千竿、詩人偶寄耳、聽苦心多端」とうたわれている。(3)〔衰聽〕未見。(5)〔商葉〕未見。「乾雨」孟郊以前に未見。『韻府』は李咸用「大雪歌」の「寒龍振鬣飛乾雨」を引くが、これは雪のことをいったものでこの句の警拔さとは比較にならない。ただし、唐代伝奇に、天帝の降雨部隊が、瓶のなかに馬牙硝のような「乾雨」を貯えているという話(『太平廣記』395「王忠政」、『唐年小錄』に出づという)があり、まったくの独力で造られた語ではないかもしれない。この句、乾雨にうたれて枯葉がおちる、枯葉から乾雨のしずくがおちる、枯葉のおちる音が乾雨のそれかと聞こえる、の三解が一応考えられるが、枯れ葉の聴覚像ととる最後の解釈が礦物化した雨にもっともふさわしい。韓愈「秋懷詩」其九の「琅玕を摧くが若」き枯葉の音が思い合わされよう。(6)〔單雲〕未見。小さく薄っぺらなふとんに身をよこたえた不安感をいうのであろうが、ふとんを雲に喩えた例は他に思い当たらない。(7)〔病骨〕孟郊以前の例は未見。李賀に、「病骨猶能在、人間底事無」(「示弟」)・「咽咽學楚吟、病骨傷幽素」(「傷心行」)という、いずれもきわめて印象的な用例がある。(8)〔酸呻〕未見。「酸」も、孟郊愛用の字面で、其十二にも「棘枝風哭酸」がある。その他、「寒溪九首」其三の「默念心酸嘶」・「秋夕貧居述懷」の「聽秋酸別情」・「離思」の「機聲有酸楚」など。悲しさ・つらさを、きわめて生理的に、味覚的なものとして表出することばの愛用にも、孟郊の感受性の質がうかがわれる。(7)(8)二句が、

孟郊晩年の抒情のあり方を物語るものであることについては本文を見よ。(9)(10)「瘦攢」(「壯落」いずれも未見。其一の「去壯」「來衰」の「壯・衰」もそうであったが、身体の状態をいう形容詞的なことばを、まず一字の抽象名詞にしてしまふ。その上で、ここではそれを主語にもつてきて、主述構文を作っている。孟郊の分析的抽象的身体把握をよく示す表現。なお詳しくは本文を見よ。(11)(12)『周易』「繫辭傳」の「天地絪縕、萬物化醇」による。この二句は、晩年の孟郊がしばしばもらす、天に対する懷疑——「欲上千級閣、問天三四言(中略)一寸地上語、高天何由聞」(「上昭成閣不得於從姪僧空院嘆嗟」)など——につながるものがあろう。

其六

- 1 老骨懼秋月 老骨 秋月を懼る
- 2 秋月刀劍稜 秋月 刀劍の稜
- 3 織威不可干 織威 干す可からず
- 4 冷魂坐自凝 冷魂 坐あひから自にして凝る
- 5 羈雌巢空鏡 羈雌 空鏡に巢くひ
- 6 仙颺蕩浮冰 仙颺 浮冰を蕩かす
- 7 驚步恐白飜 驚步 白あからさまに翻へらんかと恐れ
- 8 病大不敢凌 病 大いに凌へず
- 9 單床寤皎皎 單床 寤あきらむること皎皎たり
- 10 瘦臥心兢兢 瘦臥 心 兢兢たり

11 洗河不見水 河を洗ひて水を見ず

12 透濁爲清澄 濁りを透かして清澄と爲す

13 時壯昔空説 時 壯んなりと 昔し空しく説けるも

14 詩衰今何憑 詩 衰へて 今は何をか憑まん

〈大意〉 老衰したこの身には秋月が恐ろしい。秋月は刀劍のきつききだ。そのかほそい鋭さは身に迫って犯しがたく、冷たい魂魄はひたすら氷りついてゆくばかり。雄を失った雌鳥は空っぽの鏡である月の光のなかで巣ごもり、仙界のはやがて浮べる氷のごとき月を揺り動かす。いつ、もろにひっくり返るのではないかと、びくびくしながら足を運ぶ。病勢は盛大で、とても手がつけられぬ。たった一人の寢床に目覚めて、精神はくもりなく鋭き澄まされ、瘦せた身を横たえたまま、心は恐れおののく。黄河は月光に洗われ、水が流れているとは見えない。濁水の底まで光が透徹し澄みきってしまったのだ。いまが男ざかりだとは、昔の空しい語りごと、詩の衰えてしまった現在の私に、頼るものは何もない。

〈校〉 (3) (威) 底本注云一作輝

〈注〉 (1)「老骨」其三(3)に注した。(1)(2)は其三(1)(2)とともに月を劍に喩え、孟郊の尖锐な加害的自然像を代表する。刀劍に対する孟郊の関心は偏執的といえるほどで、加害的なイメージとしては、すでに四十代の「落第」に「棄置復棄置、情如刀刃傷」とうたわれて以来、「懊惱」の「劍戟生牙關・「飢雪吟」の「冰勝一直刀」など枚挙にいとまがない。「弔國蕩」では「天地莫生金・生金人競争」と、社会的な争いを刃物に集約してみせる。特に、この月や、「寒溪九首」の水「峽哀十首」の岩石など、加害的な自然の比喩に用いられて、もっとも孟郊らしい特色を発揮する。他方で其十四「失古劍亦折」のごとく、劍は男子の意気・節操の比喩としても用いられる。これはごく普通のことであるが、其十の「楚鏡生虬龍・「勸善吟」の「煩惱不可欺、古劍澁亦雄」のように、己れのポエジーや志気の喩、それも外からの攻撃・加害に対峙する形で出てくることに注目したい。其五「病骨可剗物」も刃物を表象しているし、前節に引いた「戲贈无本二首」

其一の「金瘡」も刃物の加害が詩に転ずることを語っていた。「峭」「聳」などの愛用の字面と同じ、孟郊のイメージの両義性を特に尖鋭な形で示すものである。(3)「織威」未見。異文の「輝」は劣る。三日月のかぼそいが鋭く身に迫る威力である。(4)「冷魂」未見。自分の魂のことともとれるが、一応月を指すとしておく。「坐自」「坐」一字と同じで、ここでは、なすところもなく、こちらには関わりなくどんどん、といった気持であろう。(5)「空鏡」未見。この一句は難解であるが、たぶん三日月を破鏡に見立て、その光のなかでやもめの雌鳥が巢についている、というのであろう。また、鏡には恐らく鸞鏡が連想されている。(6)「仙驪」未見。習見の語である「神驪」(曹植「公讖詩」など)になぞらえたものか。天界を吹くはやてであろう。この連作中では、やや異質な語である。「浮冰」未見。三日月を、空中に浮んだ氷片に喩えた。一句はやはり鋭い不安感を表出しているだろう。(7)「驚歩」未見。「白」弘治本以下、諸本「自」に作るが劣る。明白に・ありありと、の意であるが、ここでは、己れの老衰を見せつけられるような気持を含ませているだろう。(9)「單床」未見。「皎皎」「寄陝府鄧給事」に「孤省凝皎皎」の句あり、精神の澄明なるをいうので、ここでも「耿耿」とほほ同じ、目がさめきつた心理状態の形容であろう。(10)「瘦臥」未見。(11)(12)もとずくところがあるかと思うが未詳。「洗河」「透濁」はともに未見。「洗」も、自然の清浄化・透明化をいうために孟郊が用いる特徴的な字面。其十二(7)「洗聲」の他、「寒溪」其「冒頭」の「霜洗水色盡」、同じく其四の「洗出纖悉聽」など。(13)「時」弘治本・全唐詩は「詩」に作る。(14)と重なるが、「詩」の壮衰を対比強調したとするのも捨てがたい。(14)「詩」ポエジーというほどに抽象化された概念だろう。「詩衰」の意識については本文に述べる。

其七

1 老病多異慮 老病 異慮多く

2 朝夕非一心 朝夕 一心に非ず

- 3 商蟲哭衰運 商虫 衰運を哭し
- 4 繁響不可尋 繁響 尋ぬる可からず
- 5 秋草瘦如髮 秋草 瘦せて髮の如し
- 6 貞芳綴疎金 貞芳 疎金を綴る
- 7 晚鮮詎幾時 晚鮮 詎んぞ幾く時ぞ
- 8 馳景還易陰 馳景 還た陰たり易し
- 9 弱習徒自恥 弱習 徒自に恥ず
- 10 暮知欲何任 暮知 何にか任えんと欲する
- 11 露才一見讒 才を露はさば 一へに讒らる
- 12 潛智早已深 智を潜むること早に己に深し
- 13 防深不防露 深きを防ぐも 露はるるを防がずと
- 14 此意古所箴 此の意 古への箴むる所なり

〈大意〉 老いと病いのせいで、しじゅう気が変わり、朝と夕方ではもう心が一つでない。秋の虫は衰えゆく時の推移をいたみ泣き、うるさく鳴きたてるその声はどれがどれとも聞きわけがたい。秋の草は髮の毛のように瘦せ細り、操正しき菊花は、まばらな黄金を点綴している。だがこの遅咲きの鮮かな色彩もいつまでのいのちか。走り去る日の光はやはりあえなく陰気の支配下におかれてしまうのだ。若いころから学習してきたことを恥じ入るばかり、晩年の智慧は物の役にも立たぬ。才能が人眼につけばたちまち悪口を受けるものになると、とうから智慧は深く包みかくしていた。だが、人

間慎重に構えながら、見易いところに油断があるものだ。これは古人もいましめていることではないか。

〈校〉(1)〔老病〕底本注云一作危疾

〈注〉

(1)〔老病〕異文の「危疾」をとれば、いっそう危機感が強まる。(3)〔商蟲〕未見。〔衰運〕未見。(5)草の形状を髪に喩えること、「石淙十首」其四に「黑草濯鐵髮」というすぐれた表現があり、他に李賀「昌谷詩」の「草髮垂恨鬢」が思い浮ぶ。(6)〔貞芳〕顔延之「發景陽樓」に「隨山茂貞芳」、楊炯「菊花賦」に「偉貞芳於十步」という、いずれも菊花のこと。〔疎金〕未見。(7)〔晚鮮〕『韻府』に王建「和淺舍人水植詩」の「益裏盛野泉、晚鮮幽更好」を引くのみ。(8)〔馳景〕日が「馳」せるとうたうことは魏晉詩以来ごく普通で、「景」と結びついた例としては、曹植「箬篋引」〔『文選』27〕の「光景馳西流」がある。ただし「馳景」という名詞は未見。(9)(10)〔弱習〕〔暮知〕いずれも未見。(9)は、夏敬觀が「言弱歲所習學、將以見用於世、而終不可得、思之自愧」というに從う。(13)(14) 古人の箴が何をさすか未詳のため、この解は自信を欠く。「深きを防ぎ、露はれたるは防がず」(深いところで防いでおくだけでよい)と読む方がすなおかも知れないが、若い經驗を噛みしめ、讒者の油断のならなさを強調しているところの方が、この詩に基調に合すると考えひねって解してみた。(11)~(14)で、はじめて教戒的口吻が出現する。連作後半のテーマである讒者への慨嘆。

其八

1 歲暮景氣乾 歲暮 景氣乾き

2 秋風兵甲聲 秋風 兵甲の声あり

3 織織勞無衣 織織 衣無きを勞へ

4 啾啾徒自鳴 啾啾 徒自に鳴く

- 5 商聲聳中夜 商聲 中夜に聳え
 6 蹇支廢前行 蹇支 前行を廢す
 7 青髮如秋園 青髮 秋園の如く
 8 一剪不復生 一たび剪られて復た生ぜず
 9 少年如餓花 少年 餓花の如し
 10 瞥見不復明 瞥見して復た明かならず
 11 君子山岳定 君子は山岳のごとく定まり
 12 小人絲毫爭 小人は糸毫をも争ふ
 13 多爭多無壽 争ひ多ければ 寿無きこと多し
 14 天道戒其盈 天道 其の盈ちたるを戒む

〈大意〉 年も暮れて、自然の零雨気は乾燥し、秋風は武器の音をたてて吹く。はたおりは織れ織れと、冬着の支度をせきたて、くさむしはちろちろとむなく鳴くばかり。ふけゆく夜に、これら秋の自然の聲はそびえたち、瘠え衰えた足は進みゆくこともかなわぬ。黒髪は秋の庭草のように、一度切られたらさいご、二度とは生えてこない。若さは雨露に餓えた花のように、ちらりと見えただけで輝きを失なう。君子は山の如く安定し、小人は毛すじほどのものでも争いあう。争えば争うほど寿命は短くなるのだ。天道は満ち足りることをいましていてるではないか。

〔注〕(2) 例の加害的聴覚像。金風が藹殺の気を運ぶのは当然だが、これほどストレートに武器の声を聞いているのは、やはり孟郊らしいといえよう。(3) (4)との対応で、『詩経』が意識されていよう。一個所のみをあげるならば、爾風「七

月)の「無衣無褐、何以卒歲」と「十月蟋蟀入我牀下」であろう。ただし、蟋蟀・促織の声を「織織」という例は未見。(4)「嘒嘒」いうまでもなく、『詩經』召南「草蟲」の「嘒嘒草蟲」(毛伝「嘒嘒、聲也」)による。「徒自」とは、「草蟲」では、草虫と阜螽が、大夫が呼び妻が随う興となっているのに対して、詩人が孤独の身の上であることを嘆く意をこめているのであろう。(5)「商聲」詩に用いられた例として、阮籍「詠懷」「步出上東門」に「素質遊(由)商聲、悽愴傷我心」をあげるべきだろう。「箏」孟郊愛用の字面のうちでも、ことにひんばんに用いられるもの。この句と、「壽安西渡奉別鄭相公二首」其二の「悠悠孤飛景、箏箏銜霜條」・「戲贈元本二首」其一の「詩骨聳東野」・「弔元魯山十首」其八の「二三貞苦士、刷視聳危望」を読みくらべれば、孟郊の自虐のポーズに支えられたこの語の兩義性がよく理解されよう。(6)「箏支」未見。「青髮」これも当り前の語と思うが孟郊以前の例は未見。(9)「餓花」未見。奇語というべきであろう。「餓」が孟郊にとって重要な意味を持つことは前節に述べた。一応夏敬観の「不得雨露長養之花」というに従うが、自信を欠く。(11)~(14) この連作の教戒の語のなかでは、ただ一つ讒に対する言及を含まぬもの。しかし、君子と小人をストレートに對置させた倫理意識は、基本的に他と同じパターンに属する。其七でもそうであったが、自然の苛酷さと老残の様相をうたうところから、末尾の教戒への転換がはなはだ唐突である。この間を媒介するものは、孟郊にとって不要だった。本文参照。(14)『老子』の「道、沖而用之或不盈」(第四章)「保此道者、不欲盈」(第十五章)などをふまえる。

其九

- 1 冷露多瘁索 冷露 瘁索多く
- 2 枯風饒吹嘘 枯風 吹嘘饒し
- 3 秋深月清苦 秋深うして 月清苦に
- 4 蟲老聲癩疎 虫老いて 声粗疎なり

5 頽珠枝纒纒 頽珠 枝に纒纒たり

6 芳金蔓舒舒 芳金 蔓舒舒たり

7 草木亦趣時 草木も亦た時に趣き

8 寒榮似春餘 寒榮 春余に似たり

9 自悲零落生 自ら悲しむ 零落の生

10 與我心何如 我と心何如んぞや

〈大意〉 冷たい露はしきりに生命を枯らし、枯乾した風はさかんに吹きたてる。秋も深まって月は清く苦く、虫は老いてその声もあらびる。赤い木の実も枝もたわわに重なり、菊はのびひろがった枝に香り高い黄金の花をつける。草木も時節をとり逃すまいとしているのだ。さむざむとしたさかりの姿は春の終りを思わせる。枯れ落ちてゆくいのちを自ら悲しむ彼らの心と、私の心と、どちらの思いがより深いことか。

〈校〉 (9)〔自悲〕底本注云一作悲彼

〈注〉 (1)〔瘁素〕未見。いのちを病み衰えさせ、尽きさせることであろう。双声。「多瘁素」とは、そのような力が豊富だということか。(2)〔枯風〕未見。(3)〔清苦〕孟郊以前で詩に用いられた例は未見。『韻府』では学徒についていう史書の例をあげるのみ。(4)〔癩疎〕これも詩の例は未見。(5)〔頽珠〕詩の例は未見。『韻府』は蝶の文様をいう沈佺期「蛺蝶賦」「點頽珠以細窠」を引く。木の種類を特定するとすれば、瓊であろうか。「芳金」未見。「頽珠」との対による造語か。(8)〔寒榮〕李白「九日」に「鞞菊泛寒榮」の例あり、「寒花」と同意であるが、ここでは上句の草木∥頽珠・芳金を承けていると解した。(9)〔自悲〕は詩人がしみじみと悲しむ意にもとれるが、草木に感情移入していると解する方が(10)へのつながりがよいと思う。

其十

- 1 老人朝夕異 老人朝夕に異なり
- 2 生死毎日中 生死は毎日の中なり
- 3 坐隨一啜安 坐しては一啜の安きに随ひ
- 4 臥與萬景空 臥しては万景と与に空し
- 5 視短不到門 視ること短くして門に到らず
- 6 聽澁詎逐風 聴くこと澁とどこほりて詎んぞ風を逐はん
- 7 還如刻削形 還た刻削せられたる形の如く
- 8 免有織悉聰 織悉の聰きこと有るを免る
- 9 浪浪謝初始 浪浪として 初始 謝り
- 10 皎皎幸歸終 皎皎として 帰終を幸はん
- 11 孤隔文章友 文章の友より孤隔せられ
- 12 親密蒿萊翁 蒿萊の翁と親密なり
- 13 歲綠閔以黃 歲綠 閔みて以って黄ばみ
- 14 秋節迸已窮 秋節 迸りて已に窮まる
- 15 四時既相迫 四時 既に相ひ迫れば
- 16 萬慮自然叢 万慮 自然に叢がる

- 17 南逸浩淼際 南に浩淼の際に逸れ
- 18 北貧磽确中 北に磽确の中に貧し
- 19 曩懷沈遙江 曩懷 遙江に沈み
- 20 衰思結秋嵩 衰思 秋嵩に結ばる
- 21 鋤食難滿腹 鋤食 腹を満たし難く
- 22 葉衣多醜躬 葉衣 醜躬多し
- 23 礪縷不自整 粗縷 自ら整えず
- 24 古吟將誰通 古吟 誰にか通ぜん
- 25 幽竹嘯鬼神 幽竹 鬼神嘯き
- 26 楚鐵生虬龍 楚鉄 虬龍生ず
- 27 忠生多異感 忠生すれば異感多く
- 28 運鬱申邪衷 運の鬱いんるは邪衷いんに由る
- 29 常思書破衣 常に思ふ 破衣に書き
- 30 至死教初童 死に至るも初童に教えんと
- 31 習樂莫習聲 樂を習ひて声を習ふ莫れ
- 32 習聲多頑聾 声を習ふも頑聾多し
- 33 明明胸中言 明明たる胸中の言

34 願寫爲高崇 願はくば写して高崇を為さん

〈大意〉老人は朝と夕方のあいだにも姿が変わる。毎日々々が生と死の隣り合わせだ。起きているあいだは一口の飲食にありつけたと安心するばかり、横になれば目に映るものすべてとともに我が身もむなし。衰えた視力は戸口までもとどかず、耳の聞えも悪くて、とても風を追うどころではない。まずは切り刻まれた木像といったところ、おかげで聴覚過敏のわずらわしきは勘免してもらえ。消え去ったスタートのことを思うにつけ、涙はしとどに流れる。潔白さを保ちつつ、何とかゴールに到達したいものだ。文学仲間からは一人離れ、親しくつきあっているのは草深い田舎のじいさんばかり。一年をいろどる草木の緑は病み疲れて黄ばみ、秋の三月は走り去って、はやどんづまりにきた。四季の歩みがかくも切迫している以上、無限の思いが自ずとむらがり寄せるのはむりもないだろう。はてしなく広がる江南の江と湖に世を逃れたこともあるこの身だが、今は北方の石ころだらけの田畑を耕す貧窮の生活である。若き日の追憶は遙かな長江の水底に沈み、衰残の思いばかりが嵩山の秋の頂きに結びついて離れぬ。鋏を手にする暮しは空腹を満たしがたいものだし、木の葉を綴ったような衣の中身は、まず大方は醜いからだ。ぼろ着を整えようとしても私がつうたう古え振りの詩を、受け容れてくれる者などいるはずもない。おぐらいたかむらに鬼神はすだき、楚の鉄劍からは虬竜が飛び立つ。誠実さが心に生じると、しばしば異常な反応を招く。運命が難渋する原因はねじけた精神にあるのだ。私は常に考えている、このことを破れ衣に書きつけ、死んでも子供たちへの教訓として遺してやろうと(？)。楽の原理を学ぶのはいいが、演奏の練習はよしておけ、演奏がうまくなつたところで、世の中、手のつけようがないつんばばかりなんだから(？)。くもりなきわが胸中のことを書き写して、高々とかかげたいものだ(？)。

〈校〉(44)〔己〕底本注云一作又

〈注〉この一首は全篇中もつとも長く、孟郊の生活状況が概観されている点でも異色がある。また連作前半の抒情から後半の教訓に至るわたりのような性格を持つ。この詩の後半は難解な個所が多く、はなはだ自信を欠く。一応の解釈をつ

けてみたというにとどまる。(5)(6)「視」が「短」い、「聴」が「澁」するという例、いずれも未見。「風を逐ふ」とは聴覚の特別に鋭敏なことをいうのであろうが、もとづくところ未詳。(7)「刻削」『戰國策』「齊策」の桃梗の寓話に、「刻削子以爲人」とある如く、木像を考えているだろう。(8)「織悉聽」「寒溪」其四に、冬の澄みきった空気を「洗出織悉聽」と、同じことばで表現している。また、「晩雪吟」では、視覚についてであるが「鏡海見織悉」の句がある。「織悉」なもので見え聞こえてしまう状況を強調する——彼がしばしば「視聽」という語を使うのも、これと相応じる。「寒溪」其二「癡坐直視聽」など——孟郊にとって、それを免れた、というのは、なおざりない方ではない。(9)「浪浪」流涕の貌をいう通常の意に解したが、あるいはみだりな、いたづらな意の「浪」を重ね、「浪奔」に近い意味で使っているか。(10)「皎皎」ここでは、くもりなく潔白さの形容であろう。(11) 韓愈をはじめとする詩友たちに別れていることをいう。伝記的な考証及びこの句による製作年代の推定については本文に述べる。(12) 其一(9)(10)の注参照。次句と対し、(19)につながって、過去の追憶をいうととる。(13) 洛陽に住んだ晩年の孟郊は、立徳坊の住居を「莊」と呼んでおり、「寒溪」其二「洛陽岸邊道、孟氏莊前溪」、農事にたずさわっていたことは、「立徳新居十首」にくり返したわれている。其七「一旬一手版、十日九手鋤」など。右の二連作は洛陽に移り住んでもない元和元・二年・56・57才頃の作であるが、その後も同じ生活がつづいていたのであろう。ただし、この種の詩句の常として、はたして詩人がどの程度の労働に従事していたかは、判断に苦しむところである。(19)「曩懷」杜甫「上水遣懷」に「窮迫挫曩懷」の例がある。(20)「衰思」未見。(21)「沈」「結」を他動詞として、積極的な過去との断絶の意志を読みとるか、自動詞として、より受動的にとるか、微妙なところだが、私は老残の気の弱りとして、自動詞にとりたい。「結」は、凝結する、の意としてもよい。嵩山は孟郊が若い頃に隠棲した地であり(『舊唐書』『新唐書』本傳)、立徳坊の居宅から眺められるこの山に、晩年の詩人は特別の感慨を寄せていたらしい(『生生亭』その他)。(22)「葉衣」特定の典故は思いつかぬが、草衣・羅衣と同じく、隠者・仙人がまよっているような衣服であろう。むろん、貧者の衣でもある。「醜躬」未見。一句、葉衣の中身が仙人だ

という常識をひっくり返した自嘲的な諧謔ではないか。(29)〔麤纒〕未見。「葉衣」をうけて、みるが垂れ下ったようなほろのさまをいうのであろう。(30)〔古吟〕未見。〔古〕のエトスを詩に噴出させるはかなかった孟郊にとって、己れの詩は、まさに「古吟」の語で自負すべきものであったろう。むしろ前節に縷説したごとく、それは誰にも通じるはずがない。(31)〔楚鐵〕『史記』范雎傳の秦昭王のことは「吾聞楚之鐵劍利、而倡優拙」による。(32)人間には理解者を持たぬ「古吟」が、鬼神や竜劍には働きかけて感応を生じることがいう、ととったが、あるいは「古吟」そのもののイメージか。(33)このあたりから後はひどく読みにくい。「忠生」が奇異ない方であるためだろう。この二字、弘治本は「志生」全唐詩は「志士」に作る。「運鬱」との対をくすす「志士」はよくないだろう。また、この二句はやはり信義が裏切られる、という孟郊の基本テーマを語っているように思われるので、「志生」よりは「忠生」がよさそうである。「異感」が常識的に考えて「異常な感応」の意であるとする、(34)〔35〕に結びつけたくなる(夏敬観説)が、私は一応前句とは切れて、世人から思わぬ反応を受ける、つまり、忠恕の心がしつべ返しを食う、といいたいのではないかと思う。そして、孟郊は己れに倫理的欠陥を認めることが稀だから、「邪衷」は、おそらく他人のそれであろう。(36)〔37〕一応の解釈。夏敬観は「常思伏案寫書、至衣袖皆破、終其身爲蒙童師」というも、いささか無理ではないか。もっとも、晩年の詩人に直系の子孫はなかったはずだから、私の解をとると、教える対象がやや漠然とする。「初童」は夏氏のいう如く「蒙童」というに近いだろう。杜牧「奉送中丞姊夫壽自大理卿出鎮江西敘事書懷因成二十韻」に「私好初童稚」の句あり。(38)〔39〕これも自信を欠くが、おそらく〔古〕の精神を深めても、それを世間には表わすな、といいたいのだろう。(40)〔41〕未見。たぶん押韻のため「崇高」をさかさまにただけであろうが、この一句、つかまえてどこもない仕方なので、はなはだ漠然とした解釈しかつけられない。

其十一

1 幽苦日日甚 幽苦 日日に甚しく

- 2 老力歩歩微 老力 歩歩に微かなり
- 3 常恐暫下床 常に恐る 暫く床より下り
- 4 至門不復歸 門に至れば復た歸らざらんかと
- 5 飢者重一食 飢者は一食を重んじ
- 6 寒者重一衣 寒者は一衣を重んず
- 7 泛廣豈無涖 広きに泛ぶも豈に涖みぎは無からんや
- 8 恣行亦有隨 行いを恣にするも亦た隨まふ有り
- 9 語中失次第 語中 次第を失ひ
- 10 身外生瘡痍 身外 瘡痍を生ぜり
- 11 桂蠹既潛汚 桂蠹 既に潜かに汚し
- 12 桂花損貞姿 桂花 貞姿を損はる
- 13 詈言一失香 詈言 一たび香を失へば
- 14 千古聞臭詞 千古 臭詞を聞かかん
- 15 將死始前悔 將に死なんとして始めて前悔するも
- 16 前悔不可追 前悔 追ふ可からず
- 17 哀哉輕薄行 哀しい哉 輕薄の行ひ
- 18 終日與駟馳 終日 駟と馳す

〈大意〉 人知れぬ苦痛は日に日に激しく、老残の気力は一足々々弱まってゆく。一度寢床からおりて戸口まで行ったら、もう帰ってこれなくなるのではないかと、いつも心配している。飢えた者には一度の食事も大事、凍えた者には一枚の着物も大事だ。広大な水面に泛う舟にも、寄りつく岸辺が見つからぬはずはない、気儘に歩いていても、ついてまわるものはついてまわるさ。ところが、不穩当なことが口からとびだしたばかりに、わが身はたちまち傷つけられた。桂の樹も人目につかぬ木喰虫の汚染を受けてしまえば、貞潔なその花の姿は無事でいられないのだ。香りよさそうな悪口も馬脚が露われれば、千年の後まで臭気粉々たる言葉にすぎない。死が目の前に来てから後悔したところで、今さら追いつくわけにはゆきませんぞ。歎かわしいことではないか、輕薄な言行が、日がな一日四頭立ての馬車とむなしく追いかけてこしているありさまは。

〈校〉 (7)〔涖〕底本作淚、弘治本・毛本・全唐詩作涖、今據諸本改爲涖 (8)〔有隨〕底本注云一作隨時 (四)〔汚〕底本注云一作朽 (四)〔與駟馳〕底本注云一作欲驅馳

〈注〉 (1)〔幽苦〕未見。(2)〔老力〕「上昭成閣不得於從姪僧悟空院嘆嗟」にも「老力安可誇、秋海萍一根」と使われているが、孟郊以外の例は未見。(7) (8) 自信を欠くが、(5) (6)を承けて庇護者についていうととる。(7)は、「どんな頼りない状況になっても、身を寄せる木蔭は必ずあるものだ」、(8)は、「気儘に振舞っていても食と衣はついてまわる」といったところか。ただし、(8)一句(あるいは二句とも)は、己れの行動が無軌道に見えようと、守るべきものは守っている、という方向に解する可能性もあろう。この二句、うたう内容は異なるが、「遠遊聯句」の韓愈の句「廣泛信縹渺、高行恣浮游」と字面が相似る。(四) 刃物に執する孟郊が、しばしばきずのことをうたうのは、当然である。よりなまなましい現実のきずを描写する其十三を含め、すべて精神的苦痛を肉体的被害として受けとる彼の独自の感性を示す。「戲贈无本二首」其一の「金瘡」もそうだったし、他にも「訪疾」「冷氣入瘡痛、夜來痛如何、瘡從公怒生、豈以私恨多」・「飢雪吟」「飢鳥夜相啄、瘡聲互悲鳴」など。(四)〔桂蠹〕「楚辭」東方朔「七諫・怨世」の「桂蠹不知所淹留兮」をはじめ、用例は

多い。近くは李白「古風」「蟾蜍薄太清」の「桂蠹花不實」がある。(13)「詈言」其十五で全面展開される主題。「詈」は字書では「罵也」といい、また「正斥曰罵、旁及曰詈」(『集韻』)、つまりあてこすりだという。要するに陰險な悪口で、ほとんど「讒」に等しいだろう。(14)〔臭詞〕未見。(18) むろん『論語』「顔淵」の子貢のことは、「馴不及舌」をふまえる。

其十二

- 1 流運閃欲盡 流運 閃きて尽きんと欲し
- 2 枯析皆相號 枯析 皆な相ひ号ぶ
- 3 棘枝風哭酸 棘枝 風哭酸に
- 4 桐葉霜顔高 桐葉 霜顔高し
- 5 老蟲乾鐵鳴 老虫 乾鉄の鳴
- 6 驚獸孤玉咆 驚獸 孤玉の咆び
- 7 商氣洗聲瘦 商氣 声を洗ひて瘦せしめ
- 8 晚陰駢景勞 晚陰 景を駢りて勞ひかり
- 9 集耳不可退 耳に集りて 退む可からず
- 10 寧神不可逃 神を噓ばしめて 逃る可からず
- 11 蹇行散餘鬱 蹇行して余鬱を散す
- 12 幽坐誰與曹 幽坐 誰か与ともに曹とならん

- 13 抽壯無一線 壯を抽かんとするも一線無く
14 剪懷盈千刀 懷を剪りて千刀盈つ
15 清詩既名眺 清詩 既に眺の名あり
16 金菊亦姓陶 金菊 亦た姓は陶なり
17 收拾昔所棄 昔し棄てし所を收拾し
18 咨嗟今比毛 咨嗟して今毛を比ぶ
19 幽幽歲晏言 幽幽たり歲晏の言
20 零落不可操 零落して操る可からず

〈大意〉 流れゆく時間は一閃のうちに尽きようとし、枯れ枝はみな叫びあう。いばらの枝に哭く風の声は悲痛だ。梧桐の葉は霜に輝く顔を高く掲げる。老いた虫どもは乾ききつた鉄の音で鳴き、物に驚く獸は孤独な玉の声で吼える。秋の気はすべての物音を洗って瘦せさせ、年の暮れの陰気は身を粉にして日の光を駆りたてる。耳に集る物音を障ることはできぬ、心は窒息しそうになるが逃れるすべもない。よろよろと外に出て、ありあまる憂鬱を発散させようとするが、うす暗い居室にもどって坐れば、一人の友もないわが身だ。壯氣を引き出そうとするが糸一筋も見当らず、千本の刀が胸いっぱいにつまって切りつける。清冽な私の詩は謝眺ばりとの名を取っているし、菊花をいとおしむこと陶淵明の生まれ変わりといったところ。棄ててあった昔の黒髪を拾い集めては、今の白髪と見くらべて溜息をつくばかり。暗くかぼそくつぶやく年の暮れのことばは、散りこぼれてしかと述べることもかなわぬ。

〈校〉 (7)〔洗〕底本注云一作溝 (8)〔眺〕底本作眺、注云一作詩清既名郊、弘治本以下諸本皆同、眺不通、以意改眺
〈注〉〔流運〕「運流」は『文選』に陸機「歎逝賦」の「伊天地之運流」・郭璞「遊仙詩」の「運流有代謝」の例あるも、時

のめぐりを「流連」というのは未見。(「閃」これも孟郊がよく使う字面である。「峇廬全」「閃怪千石形」・「生生亭」)「仙
 閃目不停」・「弔盧殷」其三「夢世浮閃閃」・「峽哀」其三「波靈將閃然」など。(2)「枯析」「枯れくだけたもの」、即ち風
 に吹き折られる枯れ枝であるが、この種の動・形容詞を名詞的に用いる一種の代言法は中唐詩に特に著しい語法で、
 孟郊もさかんに用いる。彼の詩歴の上では、「城南聯句」をはじめとする韓愈との聯句製作がおそらくこの種の造語法
 を鍛錬する機会となっている。(3)「棘枝」未見。「荆棘」「榛棘」などと熟し、荒蕪の地の代表的景物として、魏晉詩以
 降荒廢のさまや、障害の比喩に用いられることが多く、これのみを秋の景物としてうたうことは比較的少ないようであ
 る。(『文選』には劉琨「峇廬誑詩」の「瘁此秋棘」の例があるが、これは自分の比喩である。孟郊以前では杜甫「陪鄭
 廣文遊何將軍山十首」其七の「棘樹寒雲色」がそのような例となる。)これに対して、孟郊はしばしば「棘」のみを
 秋冬の酸苦な風物としてうたい、特に「棘針」の語を頻用する。「寒地百姓吟」の「棘針風騷勞」・「寒溪」其三の「幽幽
 棘針村、凍死難耕犂」・「弔盧殷」其二の「北邙棘針草、淚根生苦辛」など。枯乾して鋭い刺を持つ荒蕪の灌木、それに
 風が悲鳴する、という構図は、孟郊の荒涼たる被害感覚にもっとも似つかわしい。「風哭」未見。(4)「霜顏」未見。木の
 葉を「顏」ということ、他の例を知らないので、このイメージはもう一つつかみがない。(5)「老蟲」先の其九(4)の「蟲
 老」とともに未見。「乾鐵」未見。(6)「驚獸」未見(「孤玉」未見。この二句は孟郊の本領がよく發揮されたすぐれた聴覚
 像である。外からの苛酷さによって高く鋭い響きが発するという、彼の詩のあり方をも語っているだろう。(7)「簡氣」
 『文選』に張載「七哀詩」「秋風吐簡氣、蕭瑟掃前林」の例あり。しかし、「声を洗う」という奇抜な発想は他に思い当ら
 ない。「洗」については其六(1)に注した。(8)「晚陰」未見。(9)「噎神」未見。其十三には「噎ぶ神」という名詞形でで
 ている。(10)「餘鬱」未見。「餘」については其(8)に注したが、ここは「ありあまる」の意である。(11)「幽坐」普通の語
 であると思うが彼以前には未見。韓愈に「和崔舍人詠二十韻」の「幽坐看侵戶」があるのみ。(12)「抽肚」「剪懷」とも
 に未見。其五(9)の「壯落」「瘦攢」について注したと同じ造語法。(13)「校」に記したごとく、諸本すべて「眺」に作

るが通じがたい。異文の「詩清既名郊」も意を成しがたいであらう。陶淵明との対であり、謝朓の朓の誤字ととるの גם とも自然なので、敢えて本文を改めた。謝朓の詩を「清」と称すること、『南齊書』本伝の「文章清麗」にはじまり、李白「送儲邕之武昌」の「詩傳謝朓清」・「宣州謝朓樓餞別校書叔雲」の「中間小謝又清發」など、定評とあってよい。この二句、孟郊の詩にはままだ出現することであるが、前後との脈絡が定かでなく、唐突な印象をうける。恐らく苦痛から「清詩」が生まれる、ということ(13)(14)とつながるのだろう。

其十三

- 1 霜氣入病骨 霜氣 病骨に入り
- 2 老人身生冰 老人 身 氷を生ず
- 3 衰毛暗相刺 衰毛 暗かに相ひ刺し
- 4 冷痛不可勝 冷痛 勝ふ可からず
- 5 鷺鷥伸至明 鷺鷥として伸びして明に至り
- 6 強強攬所憑 強ひて強ひて憑む所を攬る
- 7 瘦坐形欲折 瘦坐 形折れんと欲し
- 8 晚飢心將崩 晚飢 心將に崩れんとす
- 9 勸藥左右愚 藥を勧めて左右愚かなり
- 10 言語如見憎 言語 憎まるるが如し
- 11 聳耳噎神開 耳を聳てしも 噎いぶせ神は開け

12 始知功用能 始めて功用の能を知れり

13 日中視餘瘡 日中 余瘡を視るに

14 暗隙聞細蠅 暗隙に細蠅を聞く

15 彼鯢一何酷 彼の鯢ぐこと一へに何ぞ酷はなはだしき

16 此味半點凝 此の味 半点のみ凝れるに

17 潛毒爾無猷 潛毒 爾 猷かず

18 餘生我堪矜 余生 我れ 矜れむに堪へたり

19 凍飛幸不遠 凍飛 幸ひに遠からず

20 冬令反心懲 冬令 反つて心に懲りん

21 出沒各有時 出沒するに各おの時有り

22 寒熱苦相凌 寒熱 苦だ相ひ凌ぐ

23 仰謝調運翁 仰いで調運の翁に謝す

24 請命願有徵 命を請ふ 願はくば徵しるしあれ

〈大意〉 霜の気が病み疲れた骨に侵入し、老人の体には氷が生じる。衰えた白髪は知らぬまに肌を刺し、ひやりとする痛さは我慢できない。うめきながら(?)夜明けまでちぢこまる身を伸ばし、無理強いて頼りになる物につかまろうとする。痩せこけて坐った体はいまにも折れんばかり、老年の飢えに心はくずれおちそうだ。はたの者どもは愚かしくも薬を使えと勧めめる。そのことは、私を憎んでいるように響く。思わず耳をふるわせたが、(いわれたとうりにしたら)

息がつまるような気分がすかっ、として(？)、なるほど薬も効能があるものだときとった。昼間になってなおりかけの傷を眺めていると、暗い物の隙間から、かほそい蠅どもの羽音が聞えてきた。彼奴らの鼻のきくことといったらひどいものだ。こちらの傷には、ほんのちよつと美味しい味が固まっているだけではないか。お前らのおし隠した悪意は満足を知らない。まったく憐れむべき私の余生ではある。さいわい凍えた羽ではそう遠くまで飛びまわるわけにはゆくまい。冬の力が支配するようになれば、そのときこそ思い知ることだろうよ(？)。生き物には、それぞれ出没する時節が定まっ、ていて、熱さ寒さにひどく苦しめられるものだからな。そこで私は天を仰ぎ、時のめぐりを調節する造化の翁に感謝する。私の余命を断たずにおいていただきたい、どうかこの願いを空しくしないでほしいものだ。

〔校〕(1)句下底本注云一作聳曠神氣開 (2)〔用〕底本注云一作者 (3)〔隙〕底本作鑿、注云一作隙〔細〕底本作緦、注云一作細、隙細較易解、今姑採此兩字 (4)〔苦〕底本注云一作莫

〔注〕本文にも述べるが、この一首は、生活のディテールがとりあげられている、周囲の人間が登場し、詩人の生な感情が露呈している、被害感がなまなましい臭気を帯びている、等の点で、この連作中もっとも異色ある作といえる。また、蠅の生態は讒者の比喩ともなっており、老残の抒情を其十四・其十五の教戒へつなげる役割を果している。全十五首のうちでも、もっとも読みにくい箇所が多く、其十々々にはなほだ自信を欠くが、一応の解釈を試みて、批評を抑ぐことにしたい。(1)〔霜氣〕『文選』に、劉楨「贈五官中郎將四首」其四の「霜氣何皚皚」・鮑照「蕪城賦」の「稜稜霜氣」など、唐詩では李白「二山望金陵寄殷淑」の「盧龍霜氣冷」がある。(3)〔衰毛〕未見。(4)〔冷痛〕未見。(1)〔4) 霜氣が病骨に入り抜け落ちた毛が氷の針となって肌を刺す、という四行は、自然の苛酷さを身体内部にまで浸透させている点と、「冷痛」という、冷覚と痛覚が一体化した苦痛を発見している点で、孟郊の加「被害像のうちでも、もっとも徹底したものといえる。同じような発想の句として、「飢雪吟」冒頭の「飢鳥夜相啄、瘡聲互悲鳴、冰腸一直刀、天殺無曲情」がある。(5)〔蠶蠶〕前節に引いた「送淡公十首」其十の「蠶氣」に注したとおりわからぬ語であるが、嘆息・うめき声の貌ではないが、「伸」「欠伸」の伸、即ちのびすることであろう。(7)〔瘦坐〕未見。〔晚飢〕未見。晩年の飢えととったが、

夕暮れの飢えである可能性もなしとはしない。孟郊の飢餓については前節に述べた。(9) (10) 舌足らずないい方であると感じられるが、右のように解してみた。ここには周囲の人間に対する相当に激しい感情が顔をのぞかせている。日常生活のディテールに則して強い情念表出を行うことを通常はむしろ避けている孟郊が、どうしてもそれを行わずにはいられずにうたっているところから、以下数句にわたり、五言の枠にむりやり対象を捻じ込んだような、ぎくしゃくしてひどく読みにくい句作りの詩句がつづくことになったのだと思う。「如見僧」どうやら「左右に」に憎まれているようだ、といういい方だとするより、こちらのひがみで憎まれているように聞こえてしまう、といっているとした方がよい。むろん腹の内は前者だろうが。(11) 難解。一本の「聳嶷神氣聞」ならよりわかりやすいが、やはり本文に比べるとなだらかすぎる。「聳」についてはすでに述べたが、ここは、思わず耳がびくっと動く感じだろう。(12)「功用能」これも、もってまわったいい方であるが、右の解以外は考えつかない。(13)「餘瘡」この「餘」は一応「のこりの」の意に解したが、これも体じゅう傷だらけとすることも充分可能である。一首のプロットがあまり明瞭でないが、「衰毛」に刺された傷がなおりきらずに残っているのだろう。してみると「藥」は塗り薬か。(14) 底本の本文「暗鏗聞繩蝨」は、私にはどうしても読めないもので、「一作」を採った。このあたり、「秋懷」のみならず孟郊の老年の詩全体のなかでも、珍らしく生臭い老醜がただよっている。蝨は『詩經』小雅「青蠅」以来讒者の比喩として常用されており、以下の蝨の描写は、各句明らかにその含みが持たせてある。しかし、寓意抜きで成り立つように書いてあり、日常の出来事にいつのまにか比喩をすべりこませてゆくやり方には、独特なものがあるようだ。(20) これも難解な句。「冬令」は冬がその時令を行うこと、「反」は、「いまはいい気になっているが、その時になったら反対に」という気持であるとした。あるいは、「冬令反心(叛逆心)を懲らさん」か。(19)「凍飛」未見。「調連」未見。

其十四

1 黄河倒上天 黄河 倒さかさまに天に上るも

- 2 衆水有却來 衆水 却りて來ることあり
- 3 人心不及水 人心 水に及ばず
- 4 一直去不廻 一直ひたすらに去りて廻らず
- 5 一直亦有巧 一直にして亦た巧み有り
- 6 不肯至蓬萊 肯へて蓬萊に至らず
- 7 一直不知疲 一直に疲れを知らず
- 8 唯聞至省臺 唯だ聞く 省台に至るを
- 9 忍古不失古 古へに忍びて 古へを失はざれ
- 10 失古志易摧 古へを失へば 志 摧け易し
- 11 失古劍亦折 古へを失へば 劍も亦た折れ
- 12 失古琴亦哀 古へを失へば 琴も亦た哀し
- 13 夫子失古淚 夫子の古へを失ひし涙
- 14 當時落濯灌 當時 落つること濯灌たり
- 15 詩老失古心 詩老 古心を失ひ
- 16 至今寒皚皚 今に至るまで寒きこと皚皚たり
- 17 古骨無濁肉 古骨に濁肉なく
- 18 古衣如蘚苔 古衣 蘚苔の如し

19 勸君勉忍古 君に勸む 勉めて古へに忍へ

20 忍古銷塵埃 古へに忍ふれば 塵埃を銷さん

〈大意〉 黄河は逆流して天に昇るが、その水は再び流れもどつてもこよう。ところが人間の心という奴は水にも及ばず、

一直線に突走ったきりもどろろともしない。一直線といつても、そこには巧らみが蔵されていて、蓬萊山に行つて仙人になる道は嫌だというのだ。一直線に走つて疲れを知らず、高位高官になり上つたという話ばかりだ。いにしえの道を粗末にせず、いにしえの道を失うでない。いにしえの道を失えば、志は簡単にくじけてしまう。いにしえの道を失えば、剣も折れ、琴の音も哀れに響く。昔、孔子がいにしえを見失つたことがあつたが、そのときの涙はしとどに流れ落ちたものだった。私という老詩人も、いにしえの心を見失つて以来、白じらと輝く霜雪に囲まれ、寒さにふるえどうしだ。いにしえの骨によごれた肉はつかず、いにしえの衣は苔を綴りあわせたようだ。どうか、いにしえを大切にしようつとめられよ。いにしえを大切にすれば、世俗の塵芥は消滅してしまふだろう。

〈校〉 (四)〔亦〕底本作上、弘治本・毛本・全唐詩作亦、上似不通、今據諸本改亦

〈注〉この一首と次の其十五は完全な警戒のことばである。其十四は「忍古」と「失古」を対置して〈古〉の価値を強調する。これが老残の嘆きと接続するのは、孟郊が〈古〉のエトスにしがみつくことよつて、人生のどんづまりに向つて深まる孤絶を納得するしかなかったからだが、この〈古〉は、文化的、社会的な広がりを持たず、いわば無内容な瘦せて枯れた倫理的護符といったものでしかない。そのことがこの警戒のことばをはなはだ一本調子なものにしているだろう。(1)(2)『博物志』の星様の話を意識するか。他にもっと適切な典拠があるかもしれない。(4)〔一直〕ひたすらに、の意の俗語であると思うが、他に用例を知らない。(9)〔忍古〕〔失古〕いずれも未見。おそらく孟郊が〈古〉の理念を強調するために造つたいい方であろう。(13)(14)孔子の涙とは、『公羊傳』哀公十四年の獲麟の故事、「孔子曰、孰爲來哉、孰爲來哉、反袂拭面、涕沾袍(中略)西狩獲麟、孔子曰、吾道窮矣」を指すであろう。(15)〔詩老〕このことばに

ついでには前節に述べた。㊦〔古骨〕〔濁肉〕ともに未見。

其十五

- 1 罾言不見血 罾言 血を見ずして
- 2 殺人何紛紛 人を殺すこと何ぞ紛紛たる
- 3 聲如窮家犬 声は窮家の犬の如く
- 4 吠竇何閻閻 竇に吠ゆること何ぞ閻閻たる
- 5 罾痛幽鬼哭 罾は幽鬼を痛めて哭かしめ
- 6 罾侵黃金貧 罾は黄金を侵して貧ならしむ
- 7 言詞豈用多 言詞 豈に多きを用いんや
- 8 憔悴在一聞 憔悴 一聞に在り
- 9 古罾舌不死 古罾 舌死なざりしは
- 10 至今書云云 今に至るも書に云云たり
- 11 今人詠古書 今人古書を詠み
- 12 善惡宜自分 善惡 宜しく自ら分つべし
- 13 秦火不燕舌 秦火 舌を燕^ヤかず
- 14 秦火空燕文 秦火 空しく文を燕く

15 所以^{ゆゑ}に置更生 所以^{ゆゑ}に置更に生じ

16 至今横綱 今に至るも横に綱纏たり

〔大意〕 讒言は血を見せずに、何と夥しい殺人を行ってきたことか。その声は貧乏人の家の犬さながら、壁の穴から表に向って、きゃんきゃんとまことにうるさい。讒言の痛さに地下の亡者も泣き、讒言に侵されては黄金も貧しくなる。多くのことは費す必要はない、一言耳に入れば、人を枯れ衰えさせることができるのだ。いにしへの讒言者の舌の根が朽ちなかったという話は、現在までごまんと書物に伝えられている。当代の人びとよ、いにしへの書物を読誦し、善と悪とを自分でよく弁別するがよい。秦の焚書の火は人間の舌を焼き滅ぼしてくれず、文字を無駄に滅ぼしただけだった。かくて讒言は再び発生し、現代まで自由自在にもやもやと湧き出る始末だ。

〔校〕 (1) 〔訾言〕 底本注云一作署劍

〔注〕 其七・其十一・其十三で部分的に触れられていた「訾」(其十一(13)の注で述べたように、ほぼ讒と等しいと思うので、ここではそう訳しておく)への憤りを全面展開して、全篇をしめくくる。「讒」の意識については本文に述べる。この一首には特に注釈を要する個所はないだろう。ただ、其十四もそうであるが、この種の教戒の詩のうたい口には、寒山詩その他、唐代の民衆を対象とする教訓詩の影響があるのではないかと思う。後考に俟つ。

「秋懷」十五首の正確な製作年代は、孟郊の樂府や詠懷的な詩の大方がそうであるように、確定しがたい。しかし、この連作を覆う濃厚な老衰と病残の情調は、当然かなり年老いた詩人の姿を想像させるし、華忱之の年譜によれば元和二・三年・詩人五十七・八才頃の作とされる「寒溪」より、老残の意識は一段と徹底しているから、母の喪に服した元和四年(809)五十九才以後の作とする大島敏男の推定⁽¹⁾は恐らく当てよう。とするなら、元和元年(806)五十六

才、時の河南尹鄭餘慶の下で就いた河南水運従事・試協律郎の職を服喪のために辞した後、元和九年(814)六十四才の八月、山南西道節度使となつていた同じ鄭餘慶の幕に招かれ、旅次に急死するまでの五年間ということになる。さらに限定すれば、詩中の「孤隔文章友」(其十⁽¹⁾)から、韓愈が洛陽から長安に去つた元和六年秋以降の三年間と考えることも可能である。この間孟郊は官に復することなく洛陽で家居をつづけていたらしく、老衰と貧窮の上に、数人の子供のひきつづく天折に見舞われた後でもあつたが、詩作においては、「弔盧殷十首」「弔元魯山十首」⁽³⁾「送淡公十二首」⁽⁴⁾「濟源寒食七首」などの連作を残し、少しも衰えを見せていない。洛陽立德坊に居を定めた元和元年からということになれば、さらに「立德新居十首」⁽⁵⁾「寒溪九首」⁽⁶⁾「杏塲九首」⁽⁷⁾が加わり、「峽哀十首」もこの頃のものとする推定がもし当っているなら、連作の大部分が晩年の八九年間に作られているのであつて、この五十六才以降の洛陽時代が孟郊の創作意欲のもっとも旺盛だつた時期としてよいであろう。老年まで詩を作りつづける息の長さは、中國の詩人に共通の性格といえるだろうが、孟郊の場合には、社会的な疎外感・被害感が、老残の意識と結びつくことによつていよいよ尖鋭となり、それに固執することが彼の抒情のもっとも特徴的な方法と化している、という点から、この老年の活力は注目しておいてよい。俺はもう駄目だ駄目だと呟きながら、この老詩人はちつとも駄目にはならず、繰り言のたねはいよいよ豊富だつたと見えるのである。

孟郊には連作の詩(その圧倒的部分が五言古詩。もっともこれは彼の全作品についてもいいうることだが)がはなはだ多い。五首以上の連作が十二組、その合計百十五首は現存全作品のほぼ五分の一を占め、うち九首以上の本格的連作が九組九十五首に上る。これは唐詩人の中では相当に著しい特色といえるだろう。数だけでいえば陳子昂の「感遇」三十八首や李白の「古風」五十九首があり、さらに溯つて阮籍の「詠懷」八十二首がすぐに思い浮かぶ。これら先人の五

言古詩による大規模な詠懷言志の詩群が孟郊の連作にも明らかに影を落していることは否定できない。しかし、思想の質や志操の高下は措くとして、これらの先行する作品が一応共通の形式的な詩題に括られながら、個々の独立完結した詩編を寄せ集めたものであり、従って一時の作ではない可能性を持つのに対して、孟郊の連作は、詩題に示された共通のテーマを一貫して展開した、文字通りの連作であり、明らかに短時日のうちに一挙に作られたものである点で、まったく異なっている。この点だけで抽象すれば、例えば杜甫の「秋興」や「詠懷古蹟」に近いことになるが、それぞれに異った素材を律詩というもつとも完結度の高い詩型に鑄造した各詩篇が、季節あるいは歴史によって惹き起される共通の感慨の下に相い寄る、という構造から生まれる、杜甫の連作の高度に立体的な響鳴関係は、孟郊には求めるべくもない。

「秋懷」は、この詩人の連作の仕組みの特徴が極端な形で示されている作品であるが、秋の景物にかこまれた己れの老残の姿という単一の題材の周囲に狭く視野を絞り、反復旋回しながら、後半部に至って世道人心の險しさを歎き呪う感慨と教戒のことばに終る、という展開のしかたが直ちに印象づけられよう。いわば、一篇の詩の展開としてごく普通なやり方を、十五首にまで引き伸した形であるといえる。しかし、いかに委曲を尽した叙述を重ねたとしても、長大な一首の古詩によってうたったのでは、この連作の持つ同一旋律の反復による執拗さは期待できない。一首の詩はいかに長くなってもその一首なりの完結性が前提されており、詩脈をそうむやみに錯雑させるわけにはゆかないからである。例えば、其十四・其十五になって一首の全体を占めるに至る、いわば〈社会的〉な志向を含む感慨・教戒の口吻は、すでに其七の11~14・其八の11~14あたりから出現し始め、其十一では全面的に展開されていながら、其九・其十二では其一~其六とほぼ同質の自然に対する老残の自覚に再び立ち戻っている、という反復錯雑した進行や、

同じ自然の苛酷さと老残の歎きをうたいつつも、其一―其六・其九・其十二の各首で少しづつ景物と自己について視点を移動してゆく繰り返し方、といったものは、このような連作の形によってしか獲得しえないところであろう。それも、一首の完結性が強い近体では不可能であって、どうしてもより開放的な詩脈を持つ古詩を並べてゆくほかない。⁽⁸⁾この詩人は、単一の情念を微分的に掘り返し、ある程度の塊りとなったところで一応のまとまりをつけ、そのような一首々々を積み重ねてゆく、という手続きを取らずには、この情念に一時の解放を与えることができないような心の動き方をしていたにちがいない。かくて、読者は、老いの繰り返し言が綿々と消え尽きぬ残り火の焰のように続く、という、この詩の主題にまことにふさわしい印象を形式面から強いられることになる。単一の情念の固執と反復という性向は、同じ連作のうちでも「秋懷」と「峽哀」に特に濃厚に現われ、「寒溪」「杏塲」では視点の移動がやや広がっていると感じさせ、さらに他者の存在が詩人の心を外へと開かせている「送淡公」「弔盧殷」や、よりへしあわせな情況でうたわれている「立德新居」などでは、過去の回想・生活への自省・他人への挨拶等々が入ってきて、より多面的な視野の下に全篇が構成されているが、一回の燃焼では収まりがつかぬ、連鎖的に重なってゆく心の動きを示している点では共通しており、古詩の連作が詩人の精神の生理に深く根ざしたものであることをうかがわせる。

「秋懷」にもどり、一言を以って蔽えば、要するにくだいのである。だが、このくだきこそが孟郊の身上である以上、それに付合うことが詩人の気持を尊重する所以というものだろう。単純きわまるやり方であるが、まずこの十五首の用語の使用回数を眺めておくなら、「老」が其五・其八・其十五を除く各首に一回づつ現われて都合一二回、「病」「衰」「骨」が各七回、自然の景物でも、「蟲」「月」「風」が各七回（この他に虫では其八の「織織」「嚶嚶」、風では其六の「颯」が加わる）といった案配であって、反復繚説こそがこの連作の方法であることを端的に示している。具体的な詩

句のイメージに踏みこんでみれば、この点はいよいよ明らかとなるだろう。

時間と人間の生命に関するこの詩の〈思想〉は、基本的には、時の推移の前に人の命は脆く、そこから悲哀が必然となる、という「古詩十九首」や阮籍「詠懷詩」以来の伝統（その中には秋懷の語の先用例として意識されていたであろう謝惠連の「秋懷」⁽¹⁰⁾も含まれる）を出るものではないし、秋という凋落の季節の景物が、悲哀の抒情を誘い出す装置となっている点でも、魏晉の悲秋の詩以来の寄物陳思の発想を襲っている。⁽¹¹⁾つまり、抒情の大枠に関するかぎり、孟郊はまったく常套に従っているといつてよい。景物の種類にしても、それほど新しいものを積極的に発見しようとしてはいないし、景を景として一応客観的に捉えた上で情と映発させ、あるいは情を背後に滲ませるといふ、謝靈運山水詩以降唐詩に普遍な方法ではなく、景に情を直接注入する方法をとっている点で、唐詩としてはむしろ〈古い〉といえよう。だが、意識的に魏晉詩以来の伝統をマークしながら、この詩人がぬきさしならぬ實質に衝き動かされて到達した場所には、相当に異様な月が輝り、風が吹いていた。月は劍のように尖り、風は骨を梳るのである。漢魏以来の〈時間の思想〉を構成する二つの与件のうち、時の非情な推移の方は、自然の直接的な加害という地点にまで尖鋭化させ、生命の無常の方は、老・病という個体の物質的生命力の衰残の次元にまで徹底して還元してしまったところに、疑いもなく、孟郊のまったく独自の想像力の質があった。ここから全篇を覆う肉体的な被害感に裏付けられた自虐的ペシミズムが生まれる。

この詩における肉体の捉え方は、七回も使われている「骨」の語に象徴される。第一首の冒頭が、「孤骨」というk音双声の硬い響きによって、突兀として開始される。おそらく直観的な選択が働いていると思うが、この出だしは全篇の基調を先取りしてなかなか効いている。「骨」は、ほねそのものから、肉体一般、さらに強さと硬さの感覚

を伴って生命や品格・精神のあり方を意味するところまで抽象されてゆくことばであろう。この詩の「骨」もそのよ
うな比喩的・抽象的な方向を排除して使用されているのではないが、「峭風梳骨寒」(其二(4))「老骨懼秋月、秋月刀劍
稜」(其六(1)(2))「霜氣入病骨」(其十三(1))とうたうとき、孟郊は明らかに老残の肉体を物質的なほね、そのものにおいて
見ている。これは単に骨髓に徹するといった底の比喩ではないし、むろん生きた肉体の中に死後の白骨を見ているの
でもない。険しい風が刷過し、月の劍が切りつけるのは、あくまで生身の骨にほかならない。他方で、骨は受動的に
のみ捉えられているわけではない。「病骨可剗物」(其五(7))、病み残なわれ、細く薄く削がれた骨が、しかし鋭く研が
れた刀となって切断力を持つ、とは、「酸吟亦成文」(8)とつながって、己れのポエジーが「天物を抉摘し刻削する」
ほどの力を發揮する、ということにちがいない。衰弱の自覚をほとんど物理的な消磨にまでひっぱっていったところ
に詩が出現する。悲鳴に近い、自虐的な自負であるが、ここの「骨」には、生命力や精神の強さにまで抽象されてゆ
くこの語の含意のはばが、生理的なほねに重ねられているだろう。「骨」の含むこの価値的なものは、教戒の語をつ
らねる其十四の「古骨無濁肉」(7)によりストレートに出ているが、この場合にも、依然として肉に對置されたほね、そ
のものであることをやめていない。してみると、冒頭の「孤骨」も、意味的には「孤独な肉体」くらいの中間的なと
ころに落ち着くとしても、やはり実体としてのほねであり、同時に辛くも保たれた老残の生命力の物象化されたもの
であると読まねばならない。「肉体」ということばを使ったが、「骨」に象徴されるこの連作の心身双関的な生命は、
精神が肉体と出会う場としての「身体」といいかえた方がよいだろう。

肉体と精神を兼ねた生命を、骨という、生体の中でもっとも無機的で、硬く乾燥した存在に還元してしまうこの詩
人の想像力は、自然に向うときにも同質に働いて、風物は冷たく硬く乾き、無機的・礦物的な相貌を帯びる。もとよ

りこれは、金気が支配する肅殺の季節である素秋の伝統的季節感からはずれるものではない。じじつ、「歳暮景氣乾、秋風兵甲聲」(其八(1)(2))あたりなら、唐詩の平均的な表現水準をあまり抜いているとはいえないかもしれない。しかし、「商葉墮乾雨」(其五(5))・「枯風饒吹嘘」(其九(2))・「老蟲乾鐵鳴」(其十二(5))など、彼の造語でないとしても、かなりな奇語にちがいない乾雨・枯風・乾鉄といったことばを中核に置いた詩句には、他の詩人には真似のできない乾燥と硬度への志向を認めねばなるまい。これらの相当に強引なことばの組合わせ方が孕む緊張のなかに、優しさや湿潤さを排除した自然を構成しようとする孟郊の詩的意志がよく示されている。右の三語のうちで、「乾雨」は、注記しておいたとおり、乾いた「雨の素」として小説中に出てくるので、孟郊の独創とはいえないなさそうである。この話がどれくらい流布していたもので、ここの解釈に当たってどの程度考慮に入れなければならないのかは判断がつかないが、少くともこの語を詩に持ち込んで、形容矛盾に詩的な実質を与えていることは、孟郊の手柄としなければなるまい。また、「冷露」の語で露をうたう「冷露滴夢破」(其二(3))「冷露多瘁索」(其九(1))の二句においても、すでに引いた「峭風」「枯風」のいずれも風をうたって甚だ鋭い下句と結ばれて、その冷たい加害性には、さらに乾いた硬度が感じられる。冷たさと硬度が加害性の方向で尖鋭化されると、刀剣のイメージが出現する。「一尺月透戸、乞粟如劍飛、老骨坐亦驚、病力所尙微」(其三(1)~(4))「老骨懼秋月、秋月刀劍稜、織威不可干、冷魂坐自凝」(其六(1)~(4))。前者は戸の隙間から洩れる月光、後者は三日月であるが、いずれも老骨を懼れさせ驚かす自然の脅迫性の尖鋭的な表現となっている。其六では、月の劍はさらに細く鋭い迫力を持って身に迫り、冷たい魂魄となって凝固する。この冷却したものが鋭く尖って身に迫るというイメージは、氷雪をうたう「寒溪」では一層鮮明に展開されるが、この連作でも、其十三に、肌を刺す氷りついた毛髪が「衰毛暗相刺、冷痛不可勝」(3)(4)とうたわれ、被害感を皮膚感覚の次元で捉えよう

とする想像力のあり方が、必然的に生み出した像である。そして、ここでも孟郊には、この独特な感じ方を表出するために、どうしても、恐らくは彼の造語である「織威」という奇語が必要だったのである。宋本が「一作」として注記し、弘治本以下の諸本が本文にしてしまった「輝」は、孟郊の強引な言語感覚に不安を感じざるをえなかった後人のさかしらに出るものではないか。

痛覚・冷覚という皮膚感覚とともに、しばしばそれらと結びついた形で、この連作においては、聴覚的なイメージが大きな比重を占めていることも注目すべきであろう。「聽澁詎逐風」・「免有織悉聽」(其十(6)(8))などといっているが、老詩人の耳は秋の物音に対してはなはだ鋭敏である。深夜に鋭く聳える秋の声(其八(5))、秋の気に洗われて瘦せた物音(十二(7))は、まさに耳に集まって過むべくもない(其十二(9))のである。推し移る季節の苛酷さ、尖鋭さは、聳える梧桐に琴の哀音を響かせ(其二(9)(10))、竹を打って鬼神の吟嘯を発し(其五(1)(4)・其十(3))、兵甲の声を含み(其八(2))、枯乾して吹きまくり(其九(2))、枯れた枝々を叫ばせ、棘枝を悲痛に哭かせる(其十二(3)(4))風の音に集中する。露も草木の上に置いてしおれさせるものとしてだけではなく、涙なき老泣に替って滴瀝と滴る秋露(其一(3)(4))夢を破る冷露(其二(3))のように聴覚において捉えられる。また、詩人と共に「微」かな自然の中の「生意」(其四(1)(2))は、もっとも多く虫の音——唧唧と歎きあい(其一(2))苦しげに夜色を貪り(其三(5))、衰えゆく季節を哭き(其七(3)(4))、老いて声もすがれあらび(九(4))、乾いた鉄の音を立てる(其十二(5))、——に凝集する。

これに対して、より少ない視覚像には色彩が極端に乏しい。草の緑が「去緑」(其四(7))「歳綠閔以黃」(其十(3))という消滅の相で捉えられ、菊花が「疎金」(其七(6))「芳金」(其九(6))という、直接的な色彩語(黄)ではなく、金気から金属への連想を含む「金」の語でうたわわれているのを除けば、木の実を「積珠」とうたう其九(5)のみとってよい。

万物を漂白する素秋であるとはいえ、これはいささか極端といえよう。氷りついた月色（其二(1)）は黄河の濁水を洗って、徹底的に透明にしてしまう。そして、其三・其六ですで見たとように、視覚に入った月光は直ちに痛覚や冷覚に転化するのだ。豊富な色彩によって獲得される感覚的喜びを極度に押し殺し、透明な空気の中で硬く枯れた自然が老「骨」にぶつかってくるという構図を画くために、詩人は意識的に聴覚というより抽象度の高い感覚に依拠しようとしているにちがいない。

このような自然に対して、「骨」に集約される詩人の身体はといえ、これはもう徹底した老残病衰の自虐的な線り言の対象以外の何物でもない。いちいちを引くまでもあるまい。一足ごとに弱まる歩みに、寢床から下りて戸口まで行ったら引き返せぬかと恐れ（其十一(1)~(4)）、何事にも確信がもてず、虚耳ばかり多い（其二(7)(8)）といった案配である。老いをうたってここまで詳細・執拗な詩は、ほとんど例がないと思うが、この老残の意識には、若き日の追憶を現在と対照させるといふ感傷のパターンが見られないことが特徴的である。大島敏男は其一の「詭忍逐南帆、江山踐往昔」（9(10)）と、其十の「南逸浩淼際、北貧礎礫中、曩懷沈遙江、衰思結秋嵩」（5）~(8)）とに、過去という逃げ道をふさいで己れを現在にしがみつかせようとする、追憶の拒絶を読み取っている。¹³ 私は細かいところで解釈を異にするので、この二個所のことばそのものには大島ほど積極的な意志の表明を見ないが、むらがる悲しみのうちに湧き上るあまたの追憶に、「詭忍」の二句が一つの断絶を与えていることは間違いない。昔日の回想は一切具体的に叙述されず、上記の二個所を除けば、若年への言及は「少年如餓花、瞥見不復明」（其八(9)(10)）という、その短促を歎く二句——この「餓花」の語が、また、しかと意味を捉えられぬがいかにも孟郊らしい奇語のだが——にとどまる。逃げ道をふさいだ現在への固執は、むしろ老と病の様態をきわめてたんねんに追ってゆく全篇のうたい口にこそ紛れなく露呈さ

れているというべきだろう。

青春の追憶が断ち切れているのとちょうど見合う形で、ここには死の臭いが希薄であると思う。たしかに、「老人朝夕異、生死毎日中」(其十(1)(2))ということばはあって、死が意識されていないのではないことを示している。「曩農一線命、徒言繫網縲」(其五(1)(2))も死と紙一重の状態をいうにはちがいない。しかし、前者は直ちに「坐隨一啜安、臥與萬景空」という現状を引き出すのであり、後者も「瘦攢如此枯、壯落隨西曛」という老残の危機的状态に視点を据えた措辞である。わずかに其十(1)(2)に対応して、死への心の準備をうかがわせているにすぎない。生命の日暮を嘆きながらも、死が大きく前景に迫り上ってくる、という具合にはなっていないのだ。死は随処で背後から顔を覗かせているが、詩人の意識はむしろ生の衰弱たる老と病の現在にからみついて離れないのである。ここには、ほとんど息苦しいまでの生への執着が感じられない。生への執着といって悪ければ、老衰という生の状態に対するある異様な好奇心といえはよいかもしれない。

注のなかでも触れておいたが、この老衰にからみつく意識は、自己を眺める孟郊に、ある種の抽象的な分析力のようなものを与える。例えば、「去壯暫如剪、來衰紛如織」(其(5)(6))では、一個の身体の現在を、「壯」と「衰」に抽象された若さと老いの消長において捉え、さらにその各々を、「去」「來」という動詞で修飾した名詞を造る。「瘦攢如此枯、壯落隨西曛」(其五(9)(10))「抽壯無一線」(其十二(13))では、「瘦」「壯」を抽象して主語・目的語に据え、「攢」まったり「落」っこちたり「抽」^{ひきた}したり、という動詞と結合させる。その他にも、「疑懷」「虚聽」「疎夢」「弱心」「野歩」「病謀」「衰聽」「異慮」「瘦臥」「衰思」「老力」「瘦坐」「晚飢」「嗜神」等々、老残の身体の諸相を抽象して捉えた修飾構造の名詞(恐らく彼の造語をいくつか含むであろう)を駆使している。過去の若さも、未来の死も遮断した老いへ

の集中がこれほど細分された対象化を可能ならしめたのであろうが、同時に、風景から感覚的悦びを一切追放したのと同じ線上にある、苛酷な感性の働きを感じるのである。泣き言にはちがいないのだが、一つ一つの老態病姿は、恐ろしく正確で乾燥した輪廓を具えており、いわば老いの標本に眺め入っているような、ほとんど冷酷といたい詩人の視線に照射されている趣きがあるのだ。この視線は、あの「骨」に集約される生命感覚と見合うものだし、枯乾した加害的風景と映発して間然するところのない抒情的一体を形作っている。

さらに、老残と病衰はあり余っているにもかかわらず、ここにはなまなましい老醜の臭いが意外に希薄であると思う。恐らく其十三で、傷の味を嗅ぎつけて飛んでくる蠅のことをうたう部分——この一首は十五首中もつとも読みにくいものなので、解釈に自信を欠くが、大筋は誤っていないだろう——が唯一の例外であり、あとは、其十一(1)~(4)の老いの歩みの力なさをうたったあたりに多少その種の臭いが感じられる程度ではないか。其十三は、全篇中ただ一個所周囲の人間が登場し、老人特有のひがんだ生活感情が生な形で露出しているという点で、他の諸篇とは趣きを異にしている。(其十一も、これまた難解ながら、(5)~(6)の部分では、バトロンのな存在との関係を語っているらしい。)つまり、生活意識に媒介されたところで、はじめて老醜や老臭がなまなましく出てくるのであって、社会||倫理的な教戒に終始している其十四・其十五はいうまでもなく、自然に対応する自己意識に終始するか、あるいはそこから対人的な社会||倫理意識に一举に移る抒情的な前半の各首においても、生な老臭の介入する余地がない、ということである。なお、生活への言及という点では、其十に、「礪礪」の地に「鋤食」し「葉衣」をまとう現状を述べているが、これは自分の過去と交友からの隔離を強調したものであって、疎外感を色濃く塗り込めてはいるが、官界から排除された士人の生活形態についての語り口としては、むしろありきたりというべきであらう。日常生活の一片というには概括

的にすぎ、意識される他者も社会的隔離を強調するために対置された「文章の友」と「蒿萊の翁」であって、其十一のように具体的な生活臭を泛わせているとはいえない。

これは、孟郊が、自己の身体を「骨」に集約したことに関わるだろう。比喻的にいうなら、この詩人の身体は、骨に四肢と皮膚と感官が付き、精神が宿っているのであって、肉が欠落しているのだ。自然から感覚的愉快が排除されていることから明らかのように、そういつてよければ、詩人は一切の肉感・エロスを殺しているのである。エロスが残されていれば、老残は当然肉の滅びから発する老臭を泛わし、どこかに醜悪さが生じるはずであろう。自虐がしばしば一つの美的なポーズであるとするなら、枯乾した自然と自己の身体を加害||被害関係に置く構図も、一個の美的な装置であって、他者が社会的存在一般にまで遠ざけられ抽象化されず、具体的な肉体を伴って生活圏に現われるやいなや、この装置がくずれて、今度はまたひどく生臭い十三首の老醜——もっとも、これも徹底して被害的なのだが——が出現するという仕組みになっているのではないか。少しばかり深読みにすぎたかもしれないが、少くとも、この詩を書いたときの孟郊には、一本々々落ちてゆく歯をひねりつつ、妻子に悠悠と悟達の哲学を説いて聞かせる「落齒」⁽¹⁴⁾の韓愈のような態度は、なかなか真似のできぬ芸当だったろう。

なぜこの老詩人は、以上に見てきたような自然と老いとの特異な関係を作り出さなければならなかったのか。私には、後半部の教戒的な慨世のことばに示されている社会||倫理意識が、その根底をなしているのではないかと思えるのである。その潤いのなさや恨みがまじさに僻易する者でも認めざるをえないであろう詩的緊張を孕んだ前半部に比べるなら、この部分は、あまり出来がよいとは思えない。説教の内容がいやみでつまらぬ上に、表現水準も決して高いとはいえないのである(ただし、河水が天に上って再び逆流するという奇矯な発想や、強引にたたみ込んでゆく語り口に、孟

郊一流のあくの強さが示されている点で、独創性を認めなければならぬであろうが。だがこれが、孟郊としてはどうしてもいっておかぬわけにはゆかない連作の不可欠な構成部分であり、そこにこの連作の対社会的な動機が示されているじょう、ここを避けて通るわけにはゆかないのである。

其七(11)~(14)・其十(20)~(24)・其十一(9)~(18)・其十五の全部に繰り返したわれ、詩人の怨恨の主要な対象になっているのは、「讒」であり「冒言」である。讒・冒ということばが直接には出てこない其十の場合も、(27)(28)の私の解釈が誤らないなら、同じ体験を語っている。さらに、其十三(13)以下の、傷の臭いに鼻を効かせる蠅の姿も、讒者の暗喩となつてゐるだろう。この讒者乃至は信義の破壊に対する憤りという主題は、「寒溪」でも相当な比重を占め、讒に仆れた友人を悼む「峽哀」では全面的に開陳されるほか、その他の詠懐陳思の詩にもしばしば取り上げられている。「君子勿鬱鬱士有誇毀者作詩以贈之二首」⁽¹⁵⁾「答畫上人止讒作」⁽¹⁶⁾のように、詩題にはっきりこの主題を掲げているものもあり、少くとも前者では、誹謗を受けているのは明らかに他人であるが、彼自身にもよほど煮え湯を飲まされた体験があったのではないか。現存の伝記資料には、孟郊が讒を受けたという記録は残っていないし、作品の上からも、その具体的内容や時期について推測することはむづかしいが、少くとも彼の不幸の意識の対象が讒・冒の一点に著るしく集中してくるのは、相当晩年に及んでからのことであるようだ。いずれにせよ、体験の実相がいかなるものであったかということは、さしたる問題ではない。彼の対社会的な不幸や疎外の意識が、讒言による信義の破壊という、個別的な対人関係上の障害に収斂してゆくこの詩の運びに注目すればよいのである。其七・其十・其十一では各一篇がそのような道筋で展開しているし、連作全体が冒言に対する痛罵と慨嘆に尽きる其十五を最後に置くことによって、拡大された形で同じパターンに従う。もちろん現代の人心の險悪さに対するこの痛罵は〈古〉によって倫理的保証を得ており、

幽竹に嘯く鬼神、鉄劍の生ずる竜吟（其十箇〇）の如く悽愴で硬質な彼の詩も、「古吟」であるという自恃に支えられている。しかし、「忍古」と「失古」の対置で〈古〉の堅持を説教する其十四において、すでに孔子も古を失って泣き、「詩老」の心も霜雪の寒さに顫えているのであり、其十五に至って、〈古〉もまた「古晋」にことかかず、現代まで歴史は讒者の言に充滿しているというわけだ。この危殆に瀕した〈古〉の様態は、孟郊において〈古〉の実現に他ならなかった〈詩〉の危機と見合っている——「詩老失古心、至今寒皚皚」（其十四箇〇）「時壯昔空説、詩衰今何憑」（其六箇〇）。むろん「秋懷」そのものの旺盛な創作意欲を見れば、彼の〈詩〉が衰えた、なぞということばはとても信じる気にはなれないのだが、孟郊は、彼の側における価値的なものが危機に追いつめられている、という場所に身を据えてこの詩を書いている。そして、彼の側には倫理的な欠陥の意識がはなだ乏しいから、怨恨は屈折することなく対象である讒者に向って直進する。貧困の苦しさは述べられ、「古吟」に理解者がいないことは歎かれるが、その対極には、利祿や名声はもとより、もはや才能や抱負の実現といったものも想定されていないようだ。本来讒は社会的な関係の中で発生したものにちがいないはずだが、詩人の眼に、社会はどのような意味でも関係性を持った広がりとしては映ってこず、対人関係の障害に収斂して現象する。このような社会⇨倫理意識は不毛に枯れるほかあるまい。ただし、不毛に、というのは、生まれ身の現実がこの種の怨恨に身を委すなら、抜け路のない陥穽に閉じこめられるほかない、という意味であって、このような姿勢を詩的に仮構することが不毛な結果しかもたらさないか否かはまったく別問題である。生まれ身の人間が、このような世間への怒りと純化された老残の意識を日常的に持続しつづけて生きることが、ほとんど不可能であろう。じじつ、ほぼ同時期の作品でも、贈答・送別など、抒情の場に他者が存在している場合には、あの「秋懷」の偏屈な老人が、と思わせるほどに風通しのよい心のなごみ方を見せているのである。前節で其十二を

引いたが、同郷の詩友の帰郷を送るといふ気安さから、追憶の痛みとともに越中の風俗が楽しげに語られ、孟郊嫌いの東坡をして、こきおろしたすぐ後から、「尙を愛す銅斗歌」とうたわしめている。「送淡公十二首」(元和七年⁸¹²)六十二才頃の作)は、彼の日常的な精神の境位が充分に潤いを保ったものであったことをよく物語っている。前節に述べたとおり、この連作も詩人の生涯は不幸に終らざるをえないと語る其十一・其十二で締め括られているのだが、「詩飢老不怨」といふ、詩人の運命を甘受する意志の表白ととれることは最後の一聯に置くその醒めた認識は、己れの「詩」が衰え、寒皚皚だと歎く「秋懷」よりは、はるかにゆとりのある心の在り様を示しているといえよう。このように、「文章の友と孤隔」したとはいいいながら、気の置けない詩友とは、けっこう不幸を慰めあひもし、洛陽東北の濟源に遊べばたちまち十首に余る詩を作つて清潔な自然に心をなごませ、⁽¹⁸⁾あるいは江南の莊園に置いてある幼い娘(?)に對しは家長としての優しい心遣いを見せる、⁽¹⁹⁾という具合に、日常の心のレベルをそのまま詩の世界に移行させることも、晩年の孟郊には充分に可能であつたのだが、そうしたことも解消しきれぬ瘡のような不幸の意識が彼の心には住みついていたにちがいない。そこどころに立って眺めると、世界は異様に乾いてくる。

いや、一つの詩的な意志によつて、異様に乾いた世界を仮構し、そのような地点に向つて意識を駆り立ててゆくことなしに、心のこの部分は、どうしても取り出しようがなかつたのだ。外には讒者を、内には自然にいたためつけられる〈老骨〉を置いた構図のうちで、詩人は己れに對しても他に對しても苛酷に徹しようと努める。苛酷になる、つまり、他者との和解を、世界との共感を絶たねばならない。彼は、ひとたび世界を優しさによつて潤すならば、〈骨〉は直ちに腐蝕され、自己の根柢は失われるだろう、という地点に立とうとする。現実的にはもちろん、觀念のなかでも社会的な自己展開の契機がすでに見出しがたい以上、不幸のかなたに社会的矛盾を見てもはじまるまい。とするな

ら、どうにもならない孤絶を慰藉するために、悪ではなくて、人倫関係を破る悪人が求められるのは当然であろう。我も人、彼も人といった観点を許せば、他者は儘く己れより優位に立ってしまふ境位に身をおいているのだから、人でなしの存在が不可欠、即ち讒者というわけだ。悪人として讒者が標的に扱われたのは、現実には煮え湯を飲まされたという体験によるものではあるが、それがこれほど重い意味を持ったのは、孟郊が、官僚あるいは退休官僚以外の社会的あり方を持ちえぬ一個の士大夫として、濃厚な政治的空氣を呼吸していたからにほかなるまい。(もちろん、このような一般的ないい方ではまったく不充分であって、中唐期の政治状況が、そこに向って浮上してきた孟郊たちの階層にどう感受されたか、という点に則して具体化されなければならないのだが。)

其十三(9)の「勸藥左右愚、言語如見憎」ということばには、周昉の人間に向う相当にどす黒い悪意が洩らされており、以下の蠅の描写につながって、既述の如くこの一首に他の諸篇と異なつた生臭さを与えているのであるが、この種の具体的肉体を具えた他者に向う悪意を増殖させれば、同レベルで自己の肉体がせり出し、醜惡さが一挙に噴出しはじめるだろう。従つて悪人は讒者一般とし、現代は(へ古)を失つたという一点に抽象化しておかなければならない。其十四・其十五が詩として瘦せ、説教に墮さざるをえなかつたのは、そのせいである。ただ、教戒に転ずる直前という恰好の場所で、一個所だけ、どうしても生な憎しみを洩らす機会を作らねば気がすまぬものが、詩人の内部にわだかまっていたのだ、といえる。

さて、この詩で苛酷さが自己の側により強く傾き、詩的にもより高い言語水準に達していることは明らかだが、それは孟郊の追いつめられた矜持が、裏返しにされた形で強く働いていることを示しているだろう。これ以上他者にかかわっていれば、どんなにどろどろした怒りや生活レベルでのみじめたらしさが流出するかわからない。では、返す

刀で刻み上げる自己の姿はどんなものでなければならぬか。むろん、死も一応棚上げにし、青春によっても腐蝕されぬ老残の現在そのもの以外ではありえない。特に感傷的な追憶によって湿潤さを持ち込むことは禁物だ。人倫に社会に望みはないのだから、正統的な儒家の思想は、矜持と攻撃性を精神主義的に支えるものとしての意味しか持ちえないし、宗教的な超越に向うには——他の詩では「老いに垂んとして仏脚を抱く」⁽²¹⁾「始めて儒教の誤りに驚き、漸く化仏に親しむ」⁽²²⁾と語ってはいるもの——不幸はあまりにも重く現存している。つまり「ヘイデオロギー」はほんとうの意味では役に立たない。となれば、老残の構成与件として、身体と、それをとりまく自然のほかに、残されたものはあまりなさそうである。

かくて詩人は、克明としかいいようのない観察力を働かせて身体的老残の諸相を捉え、積み重ねてゆく。たしかにそれは、みじめな泣き言の連続であるにはちがいない。だが、練り返しになるが、生活的レベルでのみじめさは違う。身体にまで還元された地点でのみじめさであり、俺にとってこれだけが残された確かな現実なのだから、うたわぬわけにはゆかないのだ、という詩人の意志によって、意図的に突き出され仮構されたみじめさである。それはあたかも、風に梳られ、月に切られながら、滅びんとして滅びえぬ被害的な現存であることを引き受けさせられている、この詩の硬い〈骨〉のようなものだ。そして、ほとんど苦行僧のように禁欲的で、被害妄想患者の世界像を思わせるほど自己のコンプレックスが外化されたこの詩の自然像の諸性格が、このような質のみじめさを引き出し、定着するために、必然的に仮構されねばならぬものであったことは、もはや説明を要すまい。詩中で意味するところより、いくら強さを読み込むことになるかもしれないが、其一(3)の「老泣無涕洟」という一句は、「秋懷」全篇のポエジーをよく象徴するものといえる。そして、「病骨可剗物、酸呻亦成文」(其五(7)(8))・「老蟲乾鐵鳴、驚獸孤玉咆」(其十二

(5)(6)・「幽竹嘯鬼神、楚鐵生虵龍」(其十⁽²⁰⁾)といった詩句に、それぞれ弱さと強さとを微妙に変えながら、この詩の硬度と鋭さを支える老詩人の誇りが端的に物語られているといえよう。

これまで、この孟郊「秋懷」をそれ自体として理解しようとしたため、敢えて触れずにきたのであるが、周知のように、韓愈にも、その抒情的詩篇の代表作といえる「秋懷詩十一首」⁽²³⁾がある。孟郊「秋懷」の性格に一つの照明を与えることになると思うので、この韓愈の連作との比較から考えられる問題点について、簡単にふれておきたい。

韓愈「秋懷詩」の製作年については、元和元年(806)三十九才説と元和七年(812)四十五才説とがある。元和元年、即ち、憲宗即位の赦に遇って、韓愈が江陵法曹參軍から権知国子博士として長安に召還されたが、飛語を恐れて東都分司を希望していた情況下の作とする前説⁽²⁴⁾に従うなら、こちらの方が孟郊の作に先行することはほとんど確実であり、かつ、この年は孟郊も長安に僑寓し、韓愈と「城南」「鬪鷄」「納涼」「秋雨」その他の聯句を闘わせるなど、両者の交際の全期間を通じて文学的交流がもつとも濃厚だった年だから、これほどの力作が孟郊に示されなかったはずはない。近年の論者が多く従っている元和七年、即ち、前華陰令柳潤の貶黜に抗議した韓愈の上疏が無根であったとして、職方員外郎から国子博士に貶された時の作とする後説⁽²⁵⁾に従えば、孟郊は死の前々年六十二才で、仮に郊の「秋懷」を元和六年以降の作とする上述の推定が当たっているなら、両「秋懷」の製作は二・三年間のはばに収まることになる。最晩年の三年間、孟郊は、過去四年共に洛陽に在って詩の応酬も行われた韓愈は河南県令から都官員外郎に転じて長安へ去り、張籍も太常寺太祝の官にあって長安延康里の西明寺の裏手に眼疾の身を寓し⁽²⁶⁾、盧殷・劉言史は相継いで没する、という寂寥のなかにおかれ、「孤隔文章友」の思いはたしかに深かったであろうが、東西両都に隔てられた両

者の間で消息の往来までがとだえてしまったわけではない。国子博士から韓愈が比部郎中史館修撰に遷った元和八年(813)三月以降の作であることが明らかな「贈韓郎中愈二首」⁽²⁸⁾が孟から韓へ贈られ、韓愈の「江漢答孟郊」⁽²⁹⁾は、多くの注家によって右に対する答唱であるとされている。この他にも、韓愈の周辺と孟郊とを繋ぐ事実は探れるので、詩の上での両者の深いつきあいからすれば、「秋懷」のようなそれぞれの力作がたがいに送り届けられたと考えても、決して不自然ではないだろう。たとえこのことが行われなかったとしても、両「秋懷」についての情報が伝わらなかったということは、まずあるまいと思う。何よりも、同じ主題の下に五古十余首を連ねるといふ著しい共通性が、影響関係の存在を否定しえないものとしてゐるだろう。ただ、どちらが先行したかということになると、さまざまな想像が可能であるが、けっきょくのところ決め手に欠けているといわざるをえない。

いま、この点について想像を逞しくすることはさし控えるが、どちらが他の一方を意識したものか、かなりの興味を唆られずにはおれないほど、この二つの連作の対照は際立っているのだ。むしろ、どちらも相手のことに言及しているわけではないし、贈答の詩などとは違って、他方の存在をまったく前提とする必要のない完結性を具えているのだが、にもかかわらず、双方を読み比べることによって、それぞれが他方を意識しつつ、動かすことのできぬ己れの資質に従って、俺にとっての秋とはかかるものであるほかない、といひあっているかのような趣きが生じてくるのである。

韓愈における意志的な「悲哀の抑制」が、この連作に典型的に現われていることは、吉川幸次郎の指摘する⁽³¹⁾とうりであり、これに対して、孟郊について「意志」をいうなら、詩から意志的な強さを一切排除し、すべてを悲哀の極限へと駆り立ててゆく仮構力にそれを求めるほかないであろう。あまりにも鮮明な気質の違いなのだが、ただ、この気

質が、いかなる表現に媒介されて詩として成立しているか、という点を問題にするのでなければ、比較はあまり意味がない。境遇の違いをいって話が終ってしまわないともかぎらないである。

まず全篇の構成を取り上げるなら、韓には孟のような全体を通ずる意識的な展開の仕方は見られない。「秋の懐い」という一点で、統一が与えられているだけであり、各首の視点は自由に移動し、素材的にも孟よりは変化が多い。つまり、阮籍「詠懷詩」等の先行作品のスタイルにより近いのである。自虐と慨世の両端を結ぶ一線上に抒情を展開させなければならなかった孟のように、執拗な繰り返しによって脱出不可能な現状の自己確認を徹底させるのではなく、より自由な精神の移動によって、内部と外部の距離と均衡をさまざまな局面に置いて冷静に測定する、という韓の基本的姿勢が、このような構成をとらせているだろう。

一首のなかでの詩脈の展開を見るなら、景物がうたわれている場合、韓では、おうむねまず始めに景が、次いで景に触発された情が述べられるというパターンが、はなはだすっきりした形で採用されており、感慨を述べる一首の後半部も、疑惑や不安にさまよいながら、末尾の一聯に至って意志的な抑制による確認・納得に終るといふ、スムーズな流れ方である。「童子」と「我」とを対置して叙事的に展開する其八や、梧桐の落葉の音に誘われて天界へと空想がのびてゆく其九では、詩脈の流れはいっそう渋滞が少ない。連体全篇の構成では、いわば景的なものから情的なものへと大きく移行しながら、一首のなかでは、聯と聯、さらに一聯の上句と下句に景物と己れの老態とが錯雑して現われ、進行が随処で抵抗にぶつかることによって、一種相姦的な自然と身体との加害関係が苦しげな息づかいとなつて伝わってくる孟の前半部各篇の展開と比べると、韓の抒情の動き方は、古典的ともいふべき端正な平衡感覚に支配されている。

さて、その景は自然であるが、韓によって採り上げられた景物の種類（風・露・月・秋草・落葉・梧桐・菊花・虫声・寒蟬）も、それらが秋懐の引き金になるという発想も、基本的には魏晉の悲秋の詩以来の伝統に従っており、この点に關するかぎり孟と何ら変りがない。透明で乾いた情調に覆われていること、特に鋭い聴覚的イメージによって肅然たる寂寥感を表出しようとする点（其一、其八、其九）も孟と共通する。感覺的豊饒さへの陶醉を避け、自然を乾いた硬質の相貌で捉えるこの共通性は、「秋興」の杜甫をも含む盛唐詩人の知らなかった種類の精神の内圧と緊張が高まってきた中唐詩人の位相を暗示するものかもしれない。しかし、韓の自然には、孟のそれのように、身体に直接働きかけてくる加害性や、詩人の情念を擦染する強度の感情移入は存在しない。「露泣秋樹高、蟲弔寒夜永 露は秋樹の高きを泣し、虫は寒夜の永きを弔ふ」（韓、其五）と「秋深月清苦、蟲老聲麤粗」（孟、其九）の一聯ずつを比べてただで明らかであろう。韓愈は己れの心に対してと同じく、自然に対してもむしろ一定の距離を保つことによって、逆に秋の寂寥に明確な形態を与えようとしているように感じられる。其一冒頭、

聽前兩好樹 聽前の兩好樹

衆葉光蕤蕤 衆葉 光りて蕤蕤たり

秋風一披拂 秋風一たび披払すれば

策策鳴不已 策策として鳴り已まず

微燈照空牀 微燈 空牀を照らし

夜半偏入耳 夜半 偏へに耳に入る

の、秋風に鳴る夜の木葉の音を六行にわたって淡々と述べてゆく韓愈は、たぶん、この景物に予定的に附随している

伝統的な悲秋の情調を、一度客体としての物自体につき戻した上で再確認しているのだ。あるいは其八の初めの、

卷卷落地葉 卷卷たり地に落つる葉

隨風走前軒 風に随つて前軒を走る

鳴聲若有意 鳴声 意有るが如く

顛倒相追奔 顛倒して相ひ追奔す

にしても、後半二行の擬人的な表現は、特定の寓意と一対一に対応するものとは思われない。たしかに、次にうたわれる、黄昏の空堂に黙坐する詩人の姿に対するとき、木葉は外界の忙しなさの比喩としても読める。しかし、耳で見ているようなこの四句の聴覚像の確かさは、まさにそのように聞こえたのだ、という地点で、季節に生な情念を濾過した一つの形を与えようとする韓愈の乾いた姿勢を物語っていると思う。比喩の読み込みは、右のように受け取った後に始まるべきだろう。自己の情念を極限まで移入し、外化させてゆく孟郊の自然像の作り方とは、まさしく対照的であるし、月令的通念への安定した依存によって景物を並べてゆく魏晉の悲秋の詩との関係でいえば、抒情発動の基本型をそれらに仰ぎながら、ちょうど孟郊とは逆方向に、寄物陳思の発想を、いわば客体に則して「乾かす」ことにより再生しているといえる。

このような韓愈の方法がもっとも成功しているのは其九であろう。冒頭四句、

霜風侵梧桐 霜風 梧桐を侵し

衆葉著樹乾 衆葉 樹に著きて乾く

空堦一片下 空堦に一片下つれば

琤若摧琅玕 琤として琅玕を摧くが若し

という聴覚像の緊張した鋭さは、唐詩のなかでも抜群のものといつてよい。孟郊の「商葉墮乾雨」「老蟲乾鐵鳴、驚獸孤玉咆」といった秀れた詩句も、尖鋭さにおいては遙かに劣るといわねばならない。(だいたい孟郊では、上述のように景物と自己の姿とが目白押しに交錯するので、一々の詩句は高い密度を持っていても、韓愈のように、一つの景物に添ってのびやかに展開したイメージが、数句にわたる全体で明晰な形態を具えるということがないのである。)この四句でも、韓愈が定着した寂寥は恐ろしく〈乾いて〉いる。乾いた自然をうたっている、という意味においてはではなく、自然に対して詩人の心かとっている距離が乾いているのだ。しかし、決してひからびているのではないし、「南山詩」「陸渾山火」「城南聯句」等の〈実験的〉意欲を燃やした作品の言語操作に見られる知的な冷たさもここにはない。抑制された情念の激しさが裏側に貼り付くようにしながら、逆にこの上もなく鮮明な客体的造型を突き離しているのである。韓愈「秋懷詩」に流れる独特の調子の高さ、沈潜した抒情性は、このような、情念の極限を仮構する孟郊のそれとは逆方向の詩的意志によってもたらされたものである。もちろん、このような抒情の方法は、対象の乾燥度とも見合ったものであって、孟郊の場合と同様、「秋」とは韓愈のリリシズムが必然的に呼び寄せた季節に他ならなかった。しかも、韓愈の「秋」は、情念が濾過されているから、孟郊のそれよりいっそう乾いており、それでいてはるかに繊細である。そして、この冒頭四句が情緒的なものを排除し、極度に鋭く硬質であるが故に、つづく四句

謂是夜氣滅 謂へらく是れ夜気の滅して

望舒實其團 望舒 其の団を實とし

青冥無依倚 青冥依倚する無く

孟郊詩論

飛轍危難安 飛轍 危うして安んじ難きやと

という、コスミックでしかもきわめて危機的な幻想へと一挙に転化しうるのである。丸い月が軌道を外れて墮ちて来た、というのは、いかにも韓愈好みだが、しばしば幻想の誇大さそのものに耽りがちな他の詩の場合とは違って、ここには切実な危機感が存在する。表現は少しも難解でないのだが、韓愈が抱いている不安の内容はかなり奥行きが違って分りにくい。

夜気が減した青冥とは、アモルフなガス状のものが消滅して、抜けるように澄んだ夜空であろう。夜気によって月は包まれ、そのなかで息づいていた。それが失せたため、軌道に安定しえず、墜落する。あいまいな、不透明なもの的一切が消え去った韓愈の秋が、月の危機を作り出している。この四句は、月が西に落ちたことをいい、時の運びの速かさを嘆いているのだという説がある。⁽³²⁾ たしかに、次の二句「驚起出戸視、倚楹久汎瀾 驚起して戸を出でて視、楹に倚りて久しく汎瀾たり」からは、月のなくなった夜空が想像されるから、ここも憑空に造出された幻想ではないとする方がよいかもされない。しかし、時間の速さを嘆くというのは、末尾四句へのつながりはよいが、その意味だけに限定したのでは筋が通りすぎて理に墮ちるというべきであろう。また、古人は多くここに憂国の情を見ようとする。⁽³³⁾ 「夜気」が孟子を出典とする倫理的含みを持ちうる語であり、かつ天界の秩序が狂っているのだから、政治的な不正常を感じとることも十分に理由があるだろう。だが、少くともこれは、一定の寓意が透けて見えるような比喩ではありえない。いずれの解釈の可能性をも含みながら、この四句は結局のところ詩人の生の総体的な危機感が托された幻想として、高度の自立性を具えているというほかない。まさに琅玕を刻んだように確かな形を持ち、まったく月と天空の像として完結したこの幻想から、名状しがたい激しい不安——其五冒頭で「空悲」「虚警」とうたわれた——

を、冷静に見つめて詩的に対象化しようとする、韓愈の意識の緊張し尽した内圧の高さが伝わってくる。身体に還元された生の衰弱の意識を尖锐化し、不安を加害的な自然に外化したところに成立する、剣となって老骨を切り、干すべからざる「織威」を持って迫る孟郊の月のイメージと比べれば、両者の不安と想像力の質の違いがよく理解できるであろう。

自然像にやや手間取ってしまった。先を急ごう。韓愈が自らをうたうとき、その意識はすぐれて世間内在的である。孤絶の極北に身体を見つめる孟郊とはまったく反対に、韓愈の孤独や不安は社会と自己との均衡をいかに保つかという次元で揺れ動いている。いうまでもなくそれは進士階層出身の一官僚として、理想を抱きながら政治世界を生き抜いてゆかねばならない彼の位置に由来するだろう。そこに生ずる内的緊張がいかに強烈なものであったかは、右の其九の月のイメージに鋭く示されていた。この緊張に堪える勇氣と慰藉が〈古〉によって与えられる。こういえば、韓愈がもっとも典型的な正統的士大夫であったというのと同じことになるが、正統的立場を明確にイデオロギー化した文学者であった点はやはり韓愈を考える場合の出発点となるであろうし、少くとも孟郊「秋懷」との対比でいえば、士大夫としての社会的責任感や文化的コンテキストのなかで〈古〉|| 伝統につながるという姿勢を欠いた孟とは、社会的な身の据え方がまったく異っていた。もちろん、詩の問題はその先に始まる。

この連作における韓愈の内的告白の著るしい特色は、内と外の矛盾に揺れる精神の様態を、きわめて分析的に言語化してゆくやり方にあると思う。いちばんよい例である其十第六行以下の

世界忽進慮 世界 忽ち慮ひに進み

外憂遂侵誠 外憂 遂に誠を侵す

強懷張不滿 強懷 張れども満ちず

弱念缺己盈 弱念 欠けて己に盈つ

詰屈避語穿 詰屈として語穿を避け

冥茫觸心兵 冥茫として心兵に触る

敗虜千金弃 敗るれば千金を棄てんことを虞り

得比寸草榮 得るは寸草の榮に比ふ

を見れば、世間の俗悪と危うさに対して、はなはだ小心・弱気におののいている心の姿を、冷静な距離を保って細かく積み重ねてゆく方法がよく理解される。対社会的な内面の動きをこれほど分析的に捉えることは、恐らく彼以前の詩人のよくなしうるところではなかった。「冥茫觸心兵」「浮念劇含梗 浮念梗を含むより劇し」(其六)といった句には、内省的対象化によって発見された心のあり様に、改めて驚きを感じている詩人の姿が見てとれるだろう。右の六句に先立つ冒頭で

暮暗來客去 暮暗 來客去り

羣鷺各收聲 群鷺 各おの声を収む

悠悠偃宵寂 悠悠として宵寂に偃し

壘壘抱秋明 壘壘として秋明を抱く

とうたうように、秋夜はその静寂と透明さによってこの自省的な意識を鋭ぎ澄ますのであって、秋という季節が韓愈の抒情にとって必然であった所以がここにも示されている。身の衰えと自然の苛酷さを徹底化するために秋を必然と

した孟郊の急迫に対して、韓愈の心は、悠悠——はるかに延び広がってゆき、聲塵——時の経過とともに冴える、鎮静による明晰化の状態に置かれている。この明晰化した自照の意識に映る我が心は、強気でも意志的でもない。「離掛空悲、感感抱虚警 離離として空悲を掛け、感感として虚警を抱く」(其五、第一・二句)というほどに、無対象の悲哀とおののきに満ちている。その根源を確かめるように、あるいはほとんどそれらを被除するための不可欠の過程であるかのように、心の揺れを自省することばが積まれ、〈古〉が呼び込まれてくるのである。

この連作の表現は一般に平明であり、先に挙げた元和六年頃の〈実験〉的な詩語に比べれば、はるかに〈おとなしい〉といつてよいだろう。しかし、韓愈の巧みな造語の代表とされる「汲古」(「汲古得脩綬 古へを汲んで脩綬を得たり」其五)に見る如く、精神の様態を細かく抽象し且つ適確に定着することは、平明ではあっても決して水準の低いものではない。上記の詩句から「空悲」「虚警」「語穿」「心兵」といった単語を摘むだけでもこの点はよく理解されよう。この詩の表現について、孟郊との類似を指摘する評家があることは興味深い。たしかに、孟郊について既述した分析と抽象による自己凝視を五言に圧縮する句作りは、上に見てきた韓愈の場合と共通するものを持っている。たとえば韓の「喪懷若迷方、浮念劇含梗 喪懷方に迷ふが如く、浮念梗を含むより劇し」「斂退就新懦、趨營悼前猛 斂退して新懦に就き、趨營せりと前猛を悼む」(共に其五)と、孟の「野步踏事少、病謀向物違」(其四)「去壯暫如剪、來衰紛似織」(其一)とを比べるなら、いずれも恐らくそれぞれの造語を含むであろう特色ある修飾構造の二字の名詞を中核として抽象化された自己把握を行っており、自省意識の深化した中唐詩の位相を共有していることと見ることができ。ただ、その向う方向が、老残の身体へと収斂してゆく孟と、世間との対応で生じる内部の違和感を微妙に測定している韓愈とは、まったく異なっているのである。さらに、何といつても韓愈の方が一句としてより密度の高い表

現に到していることは否定できないようだ。

さて、以上のような道行きをへた上で、韓愈はようやく末尾の数句に到り、意志を発動して自他に対する寛解を行い、現在を納得して可能性を拓こうとする。だから、「丈夫意有在、女子乃多怨、丈夫意在ること有り、女子は乃ち怨み多し」(其三)「惜哉不得往、豈謂吾無能、惜しい哉往くを得ざること、豈に吾れを能くする無しと謂わんや」(其四)といっても、一方的な揚言とはうつらない。一首をうたい終った韓愈の心は決して楽天的とはいえない沈鬱な境位にある。少くとも蘇軾が楽天的だというような意味では。繊細な、しかしやはりある醒めた優しさをもって、死にゆく菊花と蝶を眺めた其十一の末尾の、「由來命分爾、泯滅豈足道、由來命爾り、泯滅豈に道ふに足らん」という、取りようによってはいふんと恐ろしいことはで全篇を終らせている詩人にとって、「尚須勉其頑、王事有朝請、尙は須く其の頑を勉むべし、王事に朝請あり」(其六)という「王事」の世界で、「頑」に鞭打ちながら、なお古琴の淡い音色(其七)を響かせつつけることができるか否か、そう樂觀はできなかつたはずである。

このような韓愈にとって、孟郊のような慨世の罵言は無縁のものであろう。実体験で孟郊がどれだけの被害を蒙つたかは知る由もないが、官界で浮沈をつづけてきた韓愈にとって、讒言をも含めた世路人心の険しさについての経験は、孟郊に負けぬものがあつたにちがいない。王叔文一党に対する執念深い悪意の抱き方を見れば、彼が單純に善意の人であつたなどとも到底信じられない。しかし、肅殺の秋氣に鋭ぎ澄まされた自照の眼で、己れの弱さと強さを測定してゆく「秋懷詩」の韓愈に関するかぎり、自己の對極に悪人を据え、世人に説教を垂れるといった姿勢はほど遠いものであつた。

貞元七年(790)韓愈二十四才、孟郊四十一才の秋、共に応募のため長安に上つてまもなく交際が始まつたこの二人の、

その後の離台と文学的交流の軌跡については、別に専論が必要であるが、翌貞元八年春初めての落第を吃して、孟が「萬物皆及時、獨余不覺春 萬物皆な時に及べるに、独り余れ春を覺えず」(長安羈旅行)⁽³⁴⁾とか、「胡風激秦樹、賤子風(道)⁽³⁵⁾中泣 胡風秦樹に激し、賤子風中に泣く」「高閣何人家、笙篁正喧吸 高閣何人の家ぞ、笙篁正に喧吸たり」(長安道)⁽³⁵⁾とかと泣きを見せたのに対して、韓が、「陋室有文史、高門有笙竽、何能辨榮悴、且欲分賢愚 陋室には文史有り、高門には笙竽有り、何んぞ能く榮悴を弁ぜん、且く賢愚を分たんと欲す」(長安交遊者一首贈孟郊)⁽³⁶⁾と慰めて以来、孟が悲愁の言を吐くたびに韓が寛解の語を以って応えるというパターンが繰り返されてきたのであるが、この両者の「秋懷」は、その大規模な総仕上げだったといえなくもない。孟郊にしてみれば、蹉跌をくり返しながらもあくまで官僚世界の梯子を昇ってゆくこの大物の詩友からの慰めを有難く思いながら、被疎外者の敗残に居直ったところで詩を作ることに以外に、俺には自己を実現する道がないのだよ、と独語することしかできなかったにちがいない。そして彼は、そのような精神の境位が凝り固まった己れの詩が、韓愈の詩風とは対蹠的なメリットを持つことを明らかに自覚していた。元和六年(811)、六十一才の孟郊は、洛陽を訪れた賈島を韓愈とともに送る「戲贈无本二首」其一の、前節引用の部分につづいて、

詩骨聳東野 詩骨 東野より聳え

詩濤湧退之 詩濤 退之より湧く

の一聯をうたっている。すでにわれわれにはなじみ深い孟郊の「骨」が「聳」えている。賈島の詩を自分たちより上だと持ち上げながら、退之はスケールの大きな詩の波濤をうねなせるがよい、瘦せた骨が鋭く聳えたつのが俺の詩だと、「戯れ」の気楽さのなかで孟郊はいいかっただらう。

- (1) 大島敏男「孤骨夜難臥 吟蟲相唧唧——孟郊寒蟲の吟」(近藤光男編『中國古典詩叢考』所収)
- (2) 韓愈「孟東野失子」(『錢本』293頁)の序に「東野連産三子、不數日輒失之、幾老、念無後以悲」といい、華忱之によれば、これは「杏殤」にうたわれた幼子の死をさす。元和二・三年頃のことであった。なお、孟郊には他に「悼幼子」(卷十)の詩があり、そこでは「負我十年恩」といっている。やや長じて夭折した別の子供もあつたらしい。因みに賈島「哭孟郊」(『長江集』卷三)には「寡妻無子息」とうたうから、結局彼には子孫は残らなかつたのであろう。
- (3) 卷十、元和六年頃の作。
- (4) 卷七、元和八年の作。
- (5) 卷五、元和元年冬洛陽立德坊に居を構えてまもない頃の作。
- (6) 「立德新居」にひきつづく、元和元・二年冬の作。
- (7) この推定については、続稿で「峽哀」をとりあげる際に述べる。
- (8) なお、連作をはじめ、孟郊のほとんどの作品が五言であることの意味、及びその句作りに関しては、続稿に触れる予定。
- (9) 吉川幸次郎「推移の悲哀—古詩十九首の主題」(『全集』卷六)「阮籍の「詠懷詩」について」(『全集』卷七)
- (10) 『文選』卷二十三
- (11) 小尾郊一「中国文学に現われた自然と自然観」第一章第一節
- (12) 続稿で「寒溪」をとりあげる際に述べる。
- (13) 大島前掲論考
- (14) 『錢本』81頁
- (15) 卷三
- (16) 卷七

(17) 「讀孟郊詩二首」其二の前節引用の個所につづく句。銅斗歌とは、越中の風俗をうたうこの連作の其三に「銅斗飲江酒、手拍銅斗歌云」とあるをさす。

(18) 死の前年の元和八年(813)六十三才、洛陽を訪れた王涯とともに濟源に遊び、「濟源春」「濟源寒食七首」「遊枋口二首」「與

王二十一員外涯遊枋口柳溪」の作があった。

(19) 「寄義興小女子」(卷七)「送淡公」其六など。いずれも養育できぬ我身を嘆く。

(20) 本節注2に引いた賈島「哭孟郊」によれば、少くとも「左右」のなかに妻はいたはずである。孟郊は「悼亡」(卷十)の詩をのこしているから、この賈島がうたう「寡妻」は後添いであろう。

(21) 「讀經」、卷九。「垂老抱佛脚、教妻讀黃經」にはじまる。

(22) 前節に引いた「自惜」末尾の二句。

(23) 『錢本』237頁以下。この詩はすでに清水茂『韓愈』(『中國詩人選』集)11・原田憲雄『韓愈』(『漢詩大系』11)に全釈が加えられているので、原文・注解は省略する。

(24) 方崧卿『韓集舉正』・陳景雲『韓集點勘』など。錢仲聯も元年説をとる。

(25) 方世學『昌黎詩集編年箋注』など。近年では清水茂・原田憲雄が七年説を採っている。

(26) 羅聯添「張籍年譜」(中)、「大陸雜誌」二十五卷五期。元和元年太祝の官に就いてから長安に住んだ張籍は、元和三年以降眼疾を患い、孟郊は元和七・八年頃彼に「寄張籍」(卷七)を贈っている。

(27) 盧殷の没年は元和五年(韓愈『登封縣盧殷墓誌銘』、劉言史が元和六・七年頃に没したことは前節注39を見よ。

(28) 卷六

(29) 『錢本』401頁

(30) 注18に記した王涯は韓愈の同年の友であったし、注26に記したようにこの頃張籍に詩を贈っているなど。

(31) 前掲清水注『韓愈』跋(『全集』第十一卷)

(32) 王元啓『讀韓記疑』「謂月西沈也、上云夜氣滅、下又承飛轍跳丸云云、則是因其沒匿、而嘆時運轉移之速、不吾待也」

(33) 何焯『義門讀書記』に「卿士惟月、此篇必有所指」といい、陳沆『詩比興箋』に「憂國恍惚、如夢如醉」というなど。

(34) 卷一

(35) 卷一

(36) 『錢本』5頁

(補註) 最終校が出た段階で、犬が枯骨を囓という発想が、寒山詩にも用いられていることを知った。寒山詩二一六(入谷・松村注『寒山詩』番号)「狗齧枯骨頭、虛自舐唇齒、不解返思巢、與畜何曾異」。入矢義高「寒山」(『中國詩人選集』5)の注によれば、この喩えは「正法念處經」に見え、中唐期の俗語「虛霑」は、右の喩えから出たことばかもしれない。しからば、この発想を孟郊のオリジナルなものと思いい込んで書いたこの前後の記述は、相当に割引きしなければならないことになる。ただ、「詩の詩」という独自のモチーフにこの通俗的な比喩を用いた点は、あくまで孟郊のものであるといつてよい。「秋懷」其十五の注に推測しておいた通俗的教戒詩からの影響が、やはり認められたわけである。

〈附記〉 本稿執筆に当り、読めない詩句の統出に閉口して、前野直彬先生にお教を乞い、長時間にわたる質問に対して、多くの明快な解釈を下していただいた。一々の個所についてその旨を記していないが、先生の教示がなかったら、本稿(及び予定の統稿)はおそらく形を成さなかったであろう。謹んで謝意を表する次第である。また、斉藤茂氏からは、数年前に「孟郊試論(稿本)」の惠贈を受け、以来この詩人について同氏と何回か語りあう機会を持って、示唆されるところが多かった。併せて深謝したい。